# 第二部　随筆と講演

# 新富亭のビラ

昭和五十三年十一月三日、文化の日に早稲田大学の校友大会に二人の孫を連れて出席した。この大会は所謂 home coming という恒例の会合で、毎年この日に大隈候の庭園に全国から校友が集い、平常疎遠になっている同期の連中が懐旧談に花を咲かせる楽しい日である。

庭内の芝生には各所に模擬店が設けられ、会場正面の演壇に向って沢山の椅子が並べられていた。模擬店で焼そば、焼鳥等を買い会館の一室に設けられたテーブルに陣取って、早々に食事を済ませ構内で催されている文化祭を見に行く。此処も見物でごった返していた。人いきれから逃げ出すように出ると、表にはさわやかな空気が流れていた。ふと見上げるとイギリス十七世紀風の演劇博物館の特異な建物が私の眼を捕えた。母校を訪れる時、いつもこの建物を覗いて見たくなるので、孫達にも一度見せておきたいと思い、その中へ入った。二階の展示室の左側に展示されている寺内萬次郎画「大隈重信と坪内逍遥」が眼をひく。これは大正八年（一

九一九）十二月十日、逍遥が早大講堂で自作の「法難」を朗読したとき国民新聞が撮影、掲載したスナップ写真によって製作されたものである。画面の御二人の生々とした面影を振り返りつつ歩を移し、部屋の左隅に展示してあった落語の名人三遊亭円朝の「花」という軸の前に立った時、私は電気にでも触れたかの様に身体中が痺れた。その軸の下に横浜伊勢佐木町通りの新富亭（亡き父竹次郎が経営していた）での大演芸会のビラを発見したからである。十二月十一日から向う五日間、晴雨に拘らず開演という素晴しい顔触れのビラであった。手許にカメラがあったらパチリとやり度いところだったが、そんな無茶も出来ないので、事務所へ駈込み係のK氏に「実は、あの二階の展示室にある新富亭のビラは私の亡父が経営していた当時のもの、自分の家にも残っていない稀らしいものなので、是非写真に撮らせて貰い、親族に贈りたいので許可してはくれまいか」と申し入れると、「それでは当方出入の写真屋に撮らせて、御希望の数だけプリントさせてお送りしましょう」と快諾してくれた。写真は暮の内に送られて来た。早速、額ぶちに入れ親戚の連中へ届けた。

年が明けて正月の四日に、この稀らしい発見――堀出し物を落語界の長老、六代目三遊亭円生師の処へ届けに行った。円生師とは新富亭時代からお馴染ではあるが、未だお宅へ訪問したことはなく、アドレスをたよりに息子の車で突然尋ねた。

師匠への贈物にウイスキーを持参した。これは一昨年欧州旅行の折、ロンドンのヒースロウ空港で買った代物で、ピンチという銘柄であった。車中でこの〝ピンチ〟という名前が気にかかっていた。――落語の「担ぎ屋」という話にもあるように芸能人の世界は兎角、縁起を担ぐもので硯箱を「当り箱」という具合だから――これは失敗したと思ったが当意即妙で「師匠、現在落語界は非常なピンチです。どうか師匠はこれを飲んでピンチヒッターになって下さいよ」と云いながらそのウイスキーを差し出した。そして、額ぶちに収めた例の新富亭のビラを進呈し、発見の経緯（いきさつ）を話した。師匠は大変に喜んでくれたが、其処に出ている顔触れの中には師匠の知らない連中が可成あった。然し考証家の師匠は落語家の系譜などを良く調べているので、「御苦労でも調べて下さい」と依頼し、半時間程歓談して辞去した。

教育文化センターにおける一月二十四日の円生師の独演会に先立って、依頼しておいた新富亭における大演芸会開催の年などについての調査結果が手許に届いた。円生師はその手紙の冒頭で「過日、四代目円生は明治三十七年一月二十七日に没しております故、その大演芸会は三十六年十二月の物でしょうと申し上げましたが、その後、記録を調べて小円遊（鳥羽長之助）が明治三十五年八月二十九日、三十二才で没すとあるのを発見しましたので、明治三十四年暮の興行と思います。先生が二十九年のお生れならば、数え六才の時と思います」と云ってい

る。するとこの興行は私が市立吉田尋常高等小学校（現在吉田中学校のある所）に入学した前年ということになる。

幼時ながら私は、その頃の景気の素晴しかったことを覚えている。またこのビラに載っている幾人かの人は、その後も新富亭へかかったことがあるので聊かは事情に通じている。常盤津「林中」の出演は当代の呼び物であった。また十五才で真打となり、当時油の乗り切っていた立花家橘之助師匠の三味線の冴えは天下に鳴り響いていた。師匠は母と大の仲よしでもあったし、新富亭出演の時、新橋駅（現在の汐留荷物駅）から横浜駅（現在の桜木町駅）まで汽車で来て、それから車で伊勢佐木町に来たのだが、ある晩、東京からの帰りだったのだろう？　母と私が相乗りで、師匠は別の車で家へ戻った記憶があり、個人的にも強く印象に残っている。幼い私の眼に映った師匠の風貌は米女優のジーン・アーサーか、わが国の三益愛子さんに似ていたように思う。師匠はその美貌と天才的な芸とで聴衆を魅了し、艶聞の多かった人である。名横綱常陸山の愛人だったり、エピソードが沢山あったが伊勢湾台風の時、最後の御主人と共に遭難され、数奇な一生を終っている。円朝の銘刀正宗に比して村正の評ある円喬の話術も聴きもので、いまでも耳底に記憶が鮮かでいる。円朝の没後、頭取になった四代目円生も出演している。これら当時一流の芸人、落語家とともに伊藤痴遊（横浜小学校の出身で私の親父の先

輩）のように人気があった新講談の松林伯知（後に猫遊軒伯知となった）も名を列ねている。彼は八世桂文楽師（本名並川益義）と同様少年の頃、当市の多勢商店に奉公していたことがある。英人ブラックの西洋人情噺（後にこの人は催眠術などをやった）にはイギリスのダービーとかアスコットの競馬の話がよく出て来た。ネタは恐らくコーナンドイルのシャーロックホームズあたりから取ったものであろうが、登場人物の名も「青木市太郎さん」などと変え、独得の外人らしいアクセント話術は今も耳に甦る。「花堂」の尺八は達者なもので、当時の俗曲なども吹奏していた。剣舞の「謹吾」は色物席では曲芸にも似た存在であった。明治時代には剣舞が盛んで、伊勢佐木町付近に日比野雷風一門の道場があったように記憶する。「若柳吉蔵」は、ステテコで有名な鼻の大きい三遊亭円遊の息子で、初代家元寿童の門人となり、二代目家元となった人である。

一枚のビラは私に往時のハマの演芸会を走馬燈のように回想させる。明治時代の最後を飾る伊勢佐木町通り新富亭での大演芸会という貴重なビラが自分の母校の演劇博物館に展示されているのを発見したことは非常な感激であったが、このビラの写真転載を快く許可して下さった演劇博物館当局と、当時の出演者諸氏の系譜を調べて下さった六代目三遊亭円生師の御協力に深く感謝し、併せて現在ピンチにある落語界に独り孤塁を守って健闘されている精進に心から

の声援を送りたい。

付記　三遊亭円朝筆「花」に散らしてある和歌「咲もまたちるも春雨はるの風　まかせて花はやすけなりけり」は円朝自身の作ではなく、伊達自得居士の悟道の歌である。自得居士は陸奥宗光の父で千広といい、幕末期和歌山藩にあって勘定奉行、寺社奉行を兼任し、公武合体その他国事に奔走した維新の志士であった。円朝は中年以後、山岡鉄舟のもとで禅に傾倒、無舌の号を得た。書は京都の松本研斉の風を学んだ江戸の豪商綾岡輝松や能書で聞えた五世市川門之助の影響を受け、これに創意を加えて自由風雅な書風を作った。

（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館刊行の図録第二集に拠る）

# 故 六代目三遊亭円生師を偲んで

「浜っ子」昭和五十四年五月号、〃あんど？ 欄の「新富亭のビラ」で筆者が本年一月四日に東京中野の六代目三遊亭円生師匠宅を訪ねて、新発見の古いビラを進呈し、その大演芸会出演者の顔触れについて師匠にいろ〳〵と調べて頂いた経緯はお読み下さった方もあると思う。あれから未だ半年とは経たぬのに師匠はもうこの世の人ではない。全く夢のようで、いまだに信じられない。ただただ亡き師匠の御冥福を祈るのみである。

今は遺墨となった五月二十七日付の手紙に〃「浜っ子」お送り下さいまして有難う存じます。いよ〳〵夏めいて参りました……。今年は春が抜けたような気が致します。天気も段々と風変りになりました。この処一寸旅行きが多く、十九日は京都にて独演会を演りまして、翌日嵯峨へ行き豆腐料理を食べました。故近衛公がひいきにしたと言われる松頼庵という家へ参りましたが、成程一寸乙な構えで、湯豆腐が「トリ」にて前はアンカケ、ユバなど揚出しも出ました

が、これは上野の江戸風な揚出しの方がうまいように思いました。予約しておかないと食べられないそうですが、近頃は笹の雪も五右衛門も何かねり物のような物にて本物の豆腐ではありません。ですがさすがに京都のは絹ごしでも箸でつまめます。東京の絹ごしはくずれてしまいますが……。しかし、豆腐一つ気軽に食べられぬとは、いや実に妙な世の中になりましたものです"。中略。

"二十三日は芸能保存会主催で、武道館において九千人という大衆の前で落語を語り、二十四日は渋谷公会堂での独演会。二十五日には丹後の宮津へ行った"ことなどを記してあり、東奔西走の師匠の俤が偲ばれる。この手紙では「湯豆腐がトリにて」という表現が非常に面白いと思った。同封してあった俳画は雲に聳ゆる富士で、『我が庵はみやこの戌亥志家ぞ住む予を噺家と人はいうなり』の一首を添え、六代三遊亭円生と署名されてあった。

六月二十二日付の手紙は二十日夜、師匠が横浜教育文化ホールで口演された時に、筆者が聴きに行ったことへの礼状で"二日続きの横浜行にて、二十一日は横浜駅東口のスカイ劇場へ出演致しました。それで以前から行ってみたいと思いながら仲々行けませんで居りました牛屋の「太田なわのれん」へ参りました。子供の頃に行った覚えがございまして、ほんとうに久方ぶりで、昔とは大分勝手も違いましたが名物の肉はヤワラカにて頂けます……。顔がすぐ分かっ

てしまいまして、向うでも「牛鍋元祖由来記」をくれましたが、その中に『昔馬車道に丸竹という寄席（明治四年～二十四年）があり、川上音次郎一派の書生芝居、円右、小さん、桃太郎などの講談落語がかかって、これら一流芸能人たちは横浜名物の牛鍋というのでよく食べに来た云々』とあったことを記し、何にいたせ丸竹の名が載って居りまして、なつかしい事でございます" と云っている。この「太田なわのれん」は昔から有名で、筆者の親父が若い頃二十銭を親から貰って、牛鍋一人前にお銚子一本付けて、お釣が来たものだという話を聞いたことがある。この手紙にも俳画二枚が同封してあった。一つは夏山の景色に『呑まれべえ　瓢々と行く　夏の医者』もう一枚は女狐が盃を前にして『宵なのに女将（おかみ）は少し酔うている』と書かれたもので、酒脱の中に師匠の色気がほのぼの漂う佳品である。

円生師匠は若い頃、円童、小円蔵時代に筆者の親父竹次郎に対して敬愛の念を抱いていたらしい。青蛙房発行の「寄席切絵図」は、師匠の名著で、東京をはじめ全国の寄席を紹介したものであるが、特に横浜の項では二十八頁を費して詳しく書いている。しかも自分が初舞台を踏んだ新富亭の記事が一番詳しく、親父や著者のことにも触れているが、此処では割愛する。親父の風格人柄に関しては自画自讃ではないが良く描かれていると思う。親父の人物評については先に物故した桂文楽師匠の特異な「あばらかべっそん」という本の中にも同様の記事があ

る。

最後に故円生師の芸風について一言すると、彼は決して天才だったわけではない。一日、一日を研究と勉強とで生き抜いた噺家であった。若い時代、落語研究会での演物(だしもの)の少ないこと、噺に迫力を欠いていたことなどでどんなにか苦しんだことか。

「寄席育ち」という彼の著書を見ても良く分る。然し彼は弛まざる勉強を続け、還暦を迎える頃にその苦労が実り、真価を発揮するに至った。この域に到達するまでには二回の転機があったと思う。その第一は大正十一年に師匠の橘家円蔵が没して、養父が円蔵、自分が円窓を襲名した時であり、彼はまだ二十三才であった。第二は養父の先代円生が亡くなった昭和十五年、彼の四十一才の時である。この二人の恩師を失った彼は孤独となったが、それに怯まず芸道に精進した。この二人の恩師、品川の円蔵と養父の五代目円生は確かに話術の師であったが、彼の本領たる人情噺の目標は明治、大正にかけての名人橘家円喬だったのだと思う。少年の頃からこの円喬師の話芸には敬服していたようだ。然し一面において、彼は円喬の陰性な性格を嫌って、自分独自の陽性な性格を話術に反映した。噺家には稀らしい品の良いマスクと溢れる愛嬌の上に、素晴らしい"間"の取り方の巧みな話術で聴衆を魅了したが、古稀を迎えるに至り、その噺に一段と滋味が加わった。晩年の師匠の話芸に接して、その昔円喬の噺に感心して

いた筆者は六代目円生こそ円喬を凌駕する名人だと思うようになった。昭和三十五年、東横落語会における「首提灯」により芸術祭文部大臣賞を受賞したその御本人が「首提灯」だけは品川の師匠には及ばないと述懐されたそうだが、まことに謙虚な言葉である。それは恐らく、あの噺に登場する田舎武士の風格は品川の師匠にぴったりで、美貌の円生師には出せない味だったのではなかろうか。とは云え、「文七元結」の噺における、三人の異なった女性の描写など、円生師生ならではと思われる。話芸であった。

故師匠を偲ぶよすがに、散歩のついでを近くの弘明寺観音の境内にある品川の師匠の墓に詣でた。碑面には、四代目橘家円蔵之碑。柳家小さん書とあり、裏面には大正十一年四月十八日。施主五代目橘家円蔵、中山千代、外門弟一同、建立とある。この五代目円蔵は円生師の養父、後の五代目円生、中山千代は品川の師匠の愛人だった関内の名妓である。因に品川の師匠は大正十一年二月、新富亭にトリで出演中病に斃れ、当時円好だった六代目円生師が三日間、代バネを勤めた。

# 古典落語の鑑賞

## まえがき

大正十二年九月一日の関東大震災以前、已に映画に押されながらも命脈を保っていた落語が、昭和に入ってトーキーの出現により、惨めにも一層窮地に陥り、従って寄席は潰滅状態となった。

筆者は、昭和二年横浜伊勢佐木町通りのオデヲン座で、「ショウボゥト」というトーキー映画を観た時、その登場人物の科白や伴奏音楽等を聴いて快哉を叫んだものである。特に西部劇におけるその音響効果や、フレッド・アステアのリズミカルなタップは、眼より耳への新しい興味を加えるようになった。

こうした時期に、わが国は漸次軍国主義に駆りたてられ、民衆の娯楽は、テンポの速い喜劇や漫才にその捌け口を見出していたが、ラジオ放送による徳川夢声の吉川英治作「宮本武蔵」

の朗読は、正に話術の粋とも言うべきものとして好評を博した。

戦後、特に近年わが国が経済大国として世界の先進国から脅威の眼をもって見られるようになり、宣伝広告の面でタレントと称する連中の活躍の場が拡大され、しばらく鳴りを静めていた話芸が復活するに至った。そのため、落語、漫才、歌謡曲、民謡等、芸能花盛りの観を呈する今日となった。「落語寄席（桂米丸司会）」とか三波伸介司会の「笑点」における頓智問答のごときは、落語家にとって、肩ならしと言うか、キャッチボールのごときものであるが、今まで眠っていた落語の妙味であるヒュウマーとかウィットを自然に織り込んだ話術、特にその話し手の個性を活かした話芸で聴衆を喜ばしたのであるが、若者の場合は当世風のギャグを利かした漫才を歓迎している。しかし所詮はその話芸としての底が浅く、その凋落も遠くはあるまい。そこで筆者は若手有為の落語家諸君が古典落語の基本をしっかり身につけ、現代的な広い視野から観察し、吸収した話題を練り上げて、その語り手独自の話芸にして貰い度い。

筆者は飽くまでも素人であるが、少年時代から聴いた名人の話芸を偲び、自分なりの批評を試み、また感想を述べて、落語を鑑賞なさる方々へのご参考に供したいと思う。

## 笑いの原点（福笑い）

この頃は少くなったが、福笑いという遊びがある。大体お正月の遊びで、お多福の顔の輪郭内にその眉毛、鼻、眼、口等を描いた紙片を眼隠ししたままで、適当と思うところに置き、それらを全部置き終ると、眼隠しを外ずして、その結果を見る。眼や鼻、口や眉の位置がトンチンカンになって、皆が腹をかかえて笑うという遊びである。

顔の造作が変ちくりんで、これが生きた人間の場合だったら、両親を恨むより仕方がない。まさか神様の悪戯とも言えず、またこうした均衡のとれないアンバランスの責めを神様に負わす訳にも行くまい。

そもそもシンメトリカルな庭園美は西洋式で、茶人の好む和風の庭は、むしろ幽邃（ゆうすい）で一見均整がとれていない。「過ぎたるは及ばざるがごとし」というが、真面目な人間というのは面白味に欠けている。それが極端な場合、糞真面目となると、むしろ滑稽になり、笑を誘う。福笑いの場合、極端なアンバランスが人を笑わせる。落語に出て来る人物も常規を逸した人柄が聴いていて面白いので、またそうした人物と対照的な人物とが滑稽の火花を散らすので、正に十（プラス）と一（マイナス）との作用をする。今日の漫才ブームも、「ボケ」と「ツッコミ」とが火花を散らすと

いう、このプラスとマイナスの作用である。

古典落語における登場人物の滑稽は、大体この正と負の記号による図式で証明されるようだ。ここで、次に古典落語鑑賞の一例をあげてみよう。

## 「つづら泥」

与太郎が借金に苦しみ、泥棒になろうと大きなつづらを背負って出て来る。途中で兄貴分という男に出逢い、その兄貴に「心を入れかえて、泥棒になるんだ」と言う。このあたりから、二人の対話は能狂言になる。結局、与太郎は質物をとられている質屋へ泥棒に入ろうということになり、例のつづらをその質屋の門口に置き、戸を敲たいて、「お宅へ泥棒が入りました」と言って、家人をおびき出し、その隙に両名は大つづらの中に入り、強慾の質屋主人と奉公人が、大つづらが門口にあるのを見付け、それを屋内に担ぎ込んだら、一仕事しようという魂胆。この計画は正にドタバタ喜劇といったところ、チャプリン初期の喜劇と言えば面白い趣向であるが、質屋もさる者、そのつづらの上に丸に柏の紋があるのを番頭が発見し、それが大工の与太郎のものだと知り、それを番頭と小僧とで与太郎の家へ運び込む、つづらの中では与太郎の方は白川夜船、兄貴が与太郎を起して、仕事にかかるが、家は汚い、物はない。与太郎が

捜し出したものは自分が着古したおんぼろの品、そのうちに眼を醒ました女房の声に、「いけねえ、かかあまで質にとりやがった」と唖然とした与太郎の叫び。

このサゲは秀逸である。これはジェスチャーでなく言葉に千金の重みがある。落語ならではの表現である。

さて、このサゲは「釜どろ」の「今夜は我家を盗まれた」というのと同工異曲と見るべきか。

## 「三人旅」

落語歳時記というのがあるかどうかは知らぬが、春の話として、三人旅を取り上げてみよう。

大体この話のマクラ（つまり、イントロダクション）として、古いたとえに「可愛い子には旅をさせろ」とか「三人旅ひとり乞食」ということから、十里踏み出すのも足拵えから厳重にしなければならず、五十里、百里と遠い旅に出る時には、親兄弟や親戚と泣きの涙で別れを惜しむといった昔の旅のこと、わが国の新幹線を遥かに上まわる超高速のフランスの汽車のことなど、距離やスピードの話でスタートをきり、「春の旅は結構でございまして、山は霞につつ

まれ、麦畑は青々と」と言う叙景に移り、辰っさん、半公、八公、三人の登場となる。

ところで落語を楽しむ場合は、まずどんなマクラが出るか、これに注意して欲しい。寄席の時間的に短い高座ではマクラをはしょって、直に本題に入る場合があるが、ちょっとお粗末で、サゲが十分に分らぬ結果にもなりかねない。

さて、この「三人旅」は、続いて、腹が減って、風が吹いたら川ッ中へ落っこちそうな鉋ッ屑みてえな歩き方だと冷やかされる八公の描写がある。この男、食意地の張ったところ、御老公（水戸の御隠居）一行中の同名の八公よろしく、半公は江戸っ子と言っても、どことなく頼りない優男（やさおとこ）、兄貴分の辰さんの性格は余りはっきりしない。

疲れた足をひきずって歩く態を見抜かれて、帰り馬に乗る。この三人の江戸っ子と馬子との話のやりとりが第一の聴きどころで、強がりの江戸っ子と妙に人を喰った馬子との対話が面白い。大正時代には品川の師匠（故六代目三遊亭円生の師匠）橘家円蔵の三人旅が秀逸であった。今日では、小さん師匠の右に出る者はまずあるまい。寄席ではこの馬子とのやりとりで終ってしまう場合が多い。

話半ばの「鶴屋善兵衛」という宿屋をさがすところなどは、むしろ駄足の嫌（きらい）があり、宿屋で飯（めし）もり女や尼を買う、例の「おしくら」（私娼）の話では、自ら色男（みつか）がっている半公が、昔、

柳橋に出たことのある女と聞いて、乗り気になり、一番カスをつかみ、ドエライ婆さんを敵娼にして悄気返るという結末。辰と八は、「こりやすくねえが、ゆうべの礼だ。女は髪を大事にするもんだ。まあ油でも買ってつけてくんね」と言って、なにがしかの金をつかませたが、半ちゃんはそうは行かない。なにしろ、昨晩の敵娼というのが頭には毛がない比丘尼だったので、「女は髪を大事にするもんだ」という皮肉は良かったが、「油でも買って、お灯明をあげてくんねえ」というサゲになる。ここで筆者のまずい川柳を披露すれば、

髪油はお灯明ですかと比丘尼言い
おしくらを比丘尼と聞いて腰くだけ

## 「花見の仇討ち」

今日では四季を通じて種々の娯楽があるが、特に若い人にはスポーツ、ゴルフ、野球、庭球、サッカー、ラグビー等、心身の鍛練を目的としたものから、庶民的なパチンコ、金儲けをねらうギャンブルを楽しむ競馬、競輪等があり、また家族打ち揃って出かけるピクニックなどがあるが、お花見というのは案外少くなったようだ。もっとも桜の名所は各地にあるが、都会ではゆっくり毛氈を敷いて、酒肴を用意して桜見物、特に夜桜を観て興ずるということは、次

第に少くなっている。況んや趣向を凝らしての桜見物というのは稀らしくなった。「長屋の花見」などという落語では、江戸時代の庶民（店子）が家主に促されて、大根の蒲鉾、沢庵の玉子焼で、お酒ならぬお茶けで「お茶かもり」と酒落れ込んで、貧乏長屋の連中が花見に繰り出すという話であるが、この「花見の仇討ち」という落語は、人出の多い上野とか飛鳥山で、半ちゃんと留さんの扮する巡礼二人が敵とつけねらう浪人（これは吉っさんの役）に図らずもめぐり逢って、いよいよ仇討ちの大立廻りになるのだが、この二人の巡礼が途中で立廻りの稽古をしながら来ると、往来で武士にその刀の鞘が当ったと咎められ、陳謝した時、この巡礼が仇討ちの途中だと聞くと、武士はこれを恕し、「では助太刀をいたそう」と言って巡礼の後を追う。折柄、多勢の人だかり、中には二人の巡礼の仇討ちと聞いて、さては先程の巡礼かと、件の武士は「助太刀に参ったぞ」と叫びながら現れる。討たれ役の吉っさんはもとより、巡礼兄弟の半ちゃん、留さんも驚いた。浪人の吉っさんが「何でこんな連中を頼んで来たのだ」と非難すると、巡礼兄弟は、「少し位斬られたら」という掛合となる。この馴れ合の勝負はなかなか埒が開かない。敵とこれを討つ巡礼兄弟が一緒になって人混みを押し分けて逃げ出す。助太刀に来た武士は背後から「勝負は五分五分だ」と叫ぶと、「まだ六部が来ない」という答がサゲになっている。

この仇討ちのクライマックスで留め男をつとめる六十六部役の金さんが途中で、笈を背負ったその姿を叔父さんに見咎められ、叔父さんの家へ連れて行かれたが、この叔父さんが金つんぼの上に、その家にはあいにく耳の聴える叔母さんが留守だったので、叔父に好きな酒を飲ませ、酔わせて逃げ出そうとしたが、返って自分の方が酔いつぶれて寝込んでしまい、趣向をこらした仇討ちの現場に駈つけることが出来ず、この仕末となってしまった。この噺は五代目三遊亭円生の円窓時代に聴いたのと、柳亭小燕枝、後の橘家文三の話が印象に残っている。特に文三の場合は、小柄な彼の身振りが小心者の巡礼を良く表現していた。

註、六十六部、略して六部という。書写した法華経を一部ずつ日本六十六か国の霊場に納めるために遍歴する行脚僧、この落語では先ずマクラにこの六十六部（六部）を説明しておかないと、今の人には分らない。

## 「崇　徳　院」

今日では珍らしい恋わずらいの噺で、大所の若旦那が上野の清水さまへおまいりに行き、お花見時でもあろうか、清水堂の高台から弁天さまの池を見おろし、向ケ岡、湯島天神、神田明神等を遥かに眺めながら、傍の茶店で一服していた時に、二、三人の女中を伴れて立ち寄られ

た大家のお嬢様を見染めた。お嬢様の方もその視線を受けとめていたらしいが、その茶店を立ち去ったあとに、茶袱紗がわすれてあるのを発見して、若旦那は早速、あとを追いかけて、その忘れ物を手渡した。

お嬢様はその厚意にすっかり感激して、再びその茶店に戻り、料紙を貰い、したためたのが崇徳院の「瀬をはやみ岩にせかるる滝川の……」という歌であった。これを若旦那が貰った。下の句は書いてなかったが、「割れても末に逢はんとぞ思ふ」の心である。この時から、寝ても醒めても、この女性のことが忘れられず、遂に病気となってしまう。医者に診てもらったが、原因不明で匙を投げてしまう。父親も心配して、出入りの熊五郎に頼んでその原因をつきとめ、その恋わずらいの相手の女性を捜がさせることになる。崇徳院の歌を手がかりに、人の出入りの多い湯屋や床屋にお百度を踏むうち、相手方のお嬢様も同様に恋わずらいとなり、こちらも出入りの鳶の頭にその相手の男性を捜がさせるうちに、床屋で熊五郎と出会う。お互に艱難辛苦の末、相手を見付けた嬉しさの余り、相手につかみかかり、もみ合ううちに、大きな花瓶がたおれて、前の鏡にぶつかり、花瓶も鏡もめちゃめちゃになる。床屋の親方は「鏡をこわしてしまって、どうしてくれるんだ?」と言うと、「いやあ親方、心配しなくてもいいよ」「なぜ?」「割れても末に買わんとぞ思う」というサゲになる。この噺の面白味は熊五郎が中

心になっている。今日の若者にとっては全く考えられない程うぶで、プラトニックラブにまで至らぬ幼稚なものである。昔は町内の小町娘と呼ばれる器量よしが評判だったが、メーキアップが進んだ現代では、いわゆる女は化けもので、これが巷に氾濫しているので、こういう怪物退治の冒険に興味のある現代青年には恋わずらいの味は到底分らぬであろう。

## 「明　烏」

およそ落語としてしばしば口演される廓噺に「五人まわし」、「居残り佐平次」、「品川心中」、「明烏」等があるが、「明烏」が最もポピュラーだと思う。それは近代の名人の一人桂文楽（本名並川益義）師の十八番として好評を博し、横浜の新富亭に出演の時など桟敷のお客様から、彼が高座に上ると、よく「明烏」と声が掛ったものである。文楽さんは若い頃、ハマの多勢商店に丁稚奉公をしたことがあり、横浜では最も人気のある落語家の一人でもあった。筆者は幾度もこの師匠の噺を聴いているが、この噺に関する限り、正に天下一品と称しても過言ではないと思っている。これに匹敵するのは、これまた昭和の名人古今亭志ん生師の「居残り佐平次」であろう。筆者がたまたま胆石、胆嚢を患って、昭和五十年の七、八月、神奈川県立成人病センター（二俣川所在）に入院した時、無事に手術が終った後のある日の午後、ベッドに横たわ

りながらNHKの故人を偲ぶラジオ番組で志ん生師の「居残り佐平次」を聴いた時、その素晴らしい話芸に全く魅せられたことがある。ラジオでこれだけ聴かせるのだから、ナマで聴いたら、どんなに素敵だろうと思った程であった。佐平次は居残りを商売としている男だから、天下御免の吉原をはじめとして、江戸の岡場所、品川、内藤新宿、板橋、千住の遊廓、いわゆる四宿を股にかけた男である。だから遊びにかけてはヴェテランで、「品川心中」の貸本屋の金さんとは大違い、大見世の旦那をまんまとオコワにかける（騙す）という強か者である。しかし「明烏」の主人公は全くうぶで、大店の若旦那として、家に引き籠って、子のたまわくでも読み耽っているという堅物で、父親が大変心配して、町内の遊び屋、源兵衛と多助に頼んで、浅草の観音様の裏手に御利益のあるお稲荷様があるから、そのお籠りと偽って吉原へ連れ出して、商人にふさわしい遊びの一つ位を覚えさせようという魂胆。

この若旦那の時次郎は見返り柳をお稲荷さまの御神木、大門を鳥居と思い込んでいたが、お茶屋から送られて大見世の座敷に通され、そこの廊下を、文金、赤熊、立兵庫などという髪を結い、部屋着を着た花魁が左で張り肘をして、右手で褄をとり、厚い草履をはいてパターン、パターンと歩くのを見たら、どんな野暮天でもこれがお稲荷様でのお籠りとは思われない。そこで若旦那が泣き出して、帰りたがるが、源兵衛と多助とは、単独では大門を出て行かれない、

もしそんなことをすると縛られて留られるとおどかす。そのうち当年十八になる絶世の美人、浦里おいらんが進んで若旦那の敵娼を買って出て非常なもてなしをする。

翌朝、「大一座振られたやつが起し番」で源兵衛と多助とがぷりぷりしながら若旦那を起しに来ると、モテモテの時次郎は昨夜とはうって変り、御満悦なのを見て、あきれ返って、俺達は先に帰ると言って若旦那の帰りを促すと、「あなたがた、さきに帰れるもんなら帰ってごらんなさい。大門でしばられちまいますから」と昨夜の二人のおどし文句をそのまま逆用するのがオチになっている。

桂文楽のこの口演は今日音盤やカセットになっているので、その言葉のやりとりを聴くことが出来るが、何と言っても、振られた同士の「へん、女に振られて甘納豆を食ってりゃ世話ぁねぇや」「けどね、朝の甘味はおつなもんだぜ、これで濃い宇治かなんかありゃあ、おもいのこすことさらになしだ」などという言葉のやりとりは絶品である。「まんじゅこわい」のサゲの「あとはお茶が一杯こわい」などと比較すると、この朝茶の味が想像されよう。

## 「淀五郎」

この噺は俳優の芸談とも言うべきもので、落語では「中村仲蔵」の噺と共によく高座に出る

噺である。「仲蔵」の場合は、俗に稲荷町という、芝居道では一番低い身分の出であったが、進取の気性に富み、役柄の工夫に懸命で、特に「忠臣蔵」五段目の斧定九郎の演出で衣裳に工夫を凝らし、それまでは見物からそっぽを向かれていたこの役に、見物の眼をひきつけたという苦心の結晶が、今日その代表的な型となっている。この仲蔵の定九郎の型が出来た経過は、六代目菊五郎の著「芸」に詳述されている。

この定九郎の型は仲蔵自身の工夫の賜であって、彼の観察力の優れていたことを証するものであり、俳優は常にその役柄を考え、その演技に工夫を凝らさなければならぬという御手本を示したものである。「勧進帳」の弁慶は九代目団十郎の極め付けであったが、先々代の松本幸四郎がこれを演ずるに当り、自分の型を創るために非常に苦心したという話を、先代（現在の白鸚）が戸板康二氏との対談で語るのを聴いたことがあるが、芸能人はその芸を磨くためにはそれなりの苦心と努力が必要である。

「淀五郎」は、これもまた芸談であるが、この人情噺の方がいかにも落語らしいサゲが利いている。

淀五郎の方は、仲蔵と異り、芝居茶屋の伜というので、相当に皆から引き立てられていたが、特に四代目市川団蔵の引き立で、「仮名手本忠臣蔵」が上演された時、四段目で、座頭の

団蔵の勤める由良之助役に対して判官役の役者が急病で倒れたので、その代役を直に選ばなければならなくなった時、当時、相中と称して未だ名題下にもなっていない沢村淀五郎が、団蔵の推挙で抜擢されることになった。さて、舞台に出ると、この淀五郎の判官が右手に九寸五分を持ち直して、左の脇腹へぶすっと突っ込む。三味線の合図で、由良之助がバタバタと花道から出る。そして七三のところで、ぴたっと平伏して、「大星由良之助義金、ただ今、到着つかまつりました」と言えば、検死役の石堂馬之烝に「近こう、近こう」と促されて、「はッ、はッ」と平伏して、ひょいと頭を上げたが……、（判官を見て）なんだい、こりゃ、ひどい判官だと驚く。「こんな判官じゃ、俺は傍へは行かれない」と言って、「近こう、近こう」と言われても進まなかった。これは意地悪団蔵の芸に対する厳しさであった。二日目も同様だった。こんな仕打ちをされて、淀五郎は腐りきり、芝居がはねて帰途につき、中村座の横を通ると、折柄の閉ね太鼓で、かねてご厄介になった栄屋の中村仲蔵親方のことを思い出し、家に戻ってからしばらくして、この仲蔵の宅へ暇乞いのために訪れ、判官切腹の経緯を語った。仲蔵は苦労人の師匠でしたから、判官の型を淀五郎に教えてやる。淀五郎は己の未熟をつくづく覚り、翌日にはこの恩師の型をもって懸命に勤め、場合によっては三河屋団蔵を斬り殺してやるの意気込みだった。この必死の舞台が三河屋の親方をうならせて、こう言わせた。「富士の山は一

晩で出来たてことをいうが、この野郎、一晩でどうして、こんないい役者になったのかしら」「これならば、そばへ行ってやらなきゃなるまい……」と思って、前に進み、（両手をつき判官を見上げ）御前……」「由良之助かァ……」と淀五郎の判官が花道を見ると、いない。「なんだ今日は出ねえのか」と思って傍に眼をやると、三河屋がいたのでびっくりした。「待ちかねたぞ!!」と淀五郎の科白。本当に実感の籠ったサゲと言えよう。

## 「大山まいり」

私共神奈川県人にとって、大山は丹沢、箱根と共になつかしい山である。拙宅の裏の「みつが丘」に登ると、遥か西方に富士の霊峯が聳え、大山、丹沢の連峯が右手、箱根がその左手にパノラマのように展開している。

筆者は、八年間教授として御厄介になった県立外語短大への往復に、晴れた日にはよくわが国のシンボルともいうべき富嶽を中央に、これが露払いのごとき県下の山々を眺めたものだ。夏になると、この霊峯の御山開きを初めとして、登山のシーズンに入り、国内ばかりでなく、海外にまで登山隊が遠征し、季節も夏ばかりか冬にまで挑戦し、前人未踏の巨峯を征服する壮挙を誇りとしている。筆者は、多くの人命を犠牲とする征服という言葉には嫌悪を感ずる。戦

争においてはもとより、登山においても……。

わが国では元来山には神が祀られ、神聖視されている。それで、江戸時代から、大山まいりのために講中が先達の指揮のもとに、六根清浄を唱えて阿夫利神社に参拝した。

こうした山嶽信仰も、お山が済むまでの精進で、今日の団体旅行の一種であった。そこで帰途には、藤沢とか神奈川宿に泊って酒を飲み、どんちゃん騒ぎをやり、果ては喧嘩口論ということになる。こうした結果を恐れて、あらかじめ罰則を作り、乱暴した者の髷を切って坊主にすることにした。

この大山まいりの一行中の熊公がへべれけに酔って、湯殿で仲間の留公と喧嘩をして、これに乱暴を働き、仕末におえなくなったが、結局、熊公が酔い潰れたので、仲間は制裁として彼の髷を切って、坊主にしてしまい、しかも彼をその宿においてけぼりにして、早立ちしてしまう。翌朝、宿の女中が、一行の立った後、部屋に坊主が蚊帳にくるまって寝ているのを発見して大騒ぎとなる。熊公は仲間の仕打ちを憤慨して、通し駕籠を雇って江戸へ先に帰り、一行の女房連中を集め、自分独り帰って来た経緯を語る。「一行は藤沢から金沢八景へ行き、米が浜のお祖師様にお参りしようということになり、舟に乗ったが、シケに逢い、舟が転覆して、その江戸の連中は溺死したとのこと。これは自分が虫の知らせか、気分が悪いので、舟宿に残

り、寝ていた時、その舟で生き残った船頭から聞いた話。自分もこの話を聞くと、どの面さげて独り江戸に帰られよう？　一度は死を覚悟したものの、この悲報を皆さんにお伝えしなければならないので戻って来たんだ」と涙ながらの話。女房達の中には、「ふだんがふだんだから、わたし達をかついでいるんだよ。騙まされちゃ駄目だよ」と怪しむ者もいたが、熊公が、被っていた手拭を取ると、坊主頭なので、一同びっくり、皆泣き出してしまう。結婚して間もない若い女房が「死んでしまう」と言えば、それよりも頭を丸めて尼になって菩提を弔うほうが良いと諭される。一番年長の吉兵衛さんの女房が真先に、「では妾の髪を切っておくれ」と言えば、他の女房連も熊の口車に乗せられて皆坊主にされる。

熊公は身に麻の衣をまとい、鉦をたたき、尼となった女房連は長い数珠をつまぐって百万べんを始めた。大山まいりの一行が江戸に入ったものの、女房達の出迎えのないのを訝ったが、長屋に戻って見れば以上のような仕末、一同、熊の復讐に唖然となり、カンカンに怒ってみたが後の祭で、長老の吉兵衛さんが「まあまあ、そんなに怒ることはない。寧ろお目出度いことだ」と言えば、「かかあを坊主にされて、どうしてお目出度いんだ？」と問い返し、「お山は晴天で、うちへ帰りゃあ、みんなお毛が（お怪我）なくっておめでたい」というサゲである。

この噺では熊公が坊主にされ、翌朝の驚きと女房連中がまんまと騙まされる口演が聴きどこ

ろである。

「富士まいり」という噺は同工異曲とも言うべきもので、一行が先達から深く戒められ、「罪を犯したことのあるやつがいたら、懺悔をするんだな」と言われる。つまり五戒を破った者は困る。妄語戒（うそをついた者）、偸盗戒（つまり、泥棒をした者）、最も悪いのは邪淫戒（女をだました者）だと聞いて一同愕然となる。そうして、皆自分の罪を告白し始める。この噺でも熊さんが一番罪つくりで、町内のおかみさんを口説いたことを告白し始めたが、浮かれて手拍子を打ち踊り出す始末、「バカア!! あきれたねえ、で、一体、相手のおかみさんてえのは、どこのおかみさんだい？」「うわぁ、どうもめんぼくねぇ、先達さん、おまえんとこのおかみさんだ」。

この噺では最後に金ちゃんが青くなった。「この人は初山で、お山に酔ったな」と言えば、「酔ったかも知れねえ、ちょうど、ここが五合目だから……」というサゲになっているが、このサゲをつけず、「どうもめんぼくねえ……」で終っているのが効果的で、確か六代目桂文楽の口演はそうだった。今日では小さい子供でも登れる時代となったし、若者がウイスキーの水割を何杯も飲んで平気な世の中だから、ちょうど五合目と言うよりも、未だ五合目なのにの方が利き目があるかも知れない。もっとも今日では、バスで五合目まで登れるようです。

## 「船　徳」

河があれば舟がある。屋形舟で夕涼みという酒落れた遊びは江戸の風物であったが、明治生れの私の子供の頃には、横浜で山下の海水浴場へ行く時に、吉田橋の袂から早舟という十人乗り位の舟が出ていたものである。

隅田川沿いの料亭で遊ぶ旦那衆を、送り迎えする舟の船頭のいなせな格好は絵になるものだった。「船徳」という落語は、大家の若旦那が、遊びに耽って親に勘当され、柳橋の大枡という船宿に居候になっていたが、ある時、船頭が出払ってしまった。たまたま客が、こんな暑い日にはほこりを浴びて歩くのも嫌だから舟で行こう、と大枡へやって来た。女主人が「今日は六千日さまで、お舟がみんな出払っておりますんで、お気の毒さまでございました」と断ると、客は「そいつぁまずいね、友だちがいやがるのを無理につれてきたんだから、それじゃあ、あたしの立ち場がないじゃあねえか。あゝ、そういえば、おかみ、河岸に一艘もやってあったぜ」という。するとおかみは「お船はございますんですが、お役に立つ若いものがおりませんので……」と一応断る。しかし客は諦めきれず、傍で居眠りしていた徳さんを見付けて、「大桟橋までやってくれ、そうすればすぐ帰えすから」といって無理矢理におかみに頼みこん

で、徳さんをピンチヒッターにひっぱり出す。この若旦那、船頭志願とはいいながら、腕は未熟、お客から「おい若え衆、竿は三年、櫓は三月ぐらいのことは心得てるよ。いつまでもその竿を突っ張ってねえで、いいかげん櫓とかわったらどうなんだい？」といわれ、しばらくして漕ぎ出したが、うまくゆかない。同じ所で、ぐるぐるまわったり、舟虫のように、舟が岸にくっついてしまい、お客に洋傘で岸を突いて下さいといって、突いて貰ったが、その洋傘が石垣のあいだにはさまって、とれない。舟は岸から離れたが、洋傘は手をのばしても届かない。「もういっぺん、あすこへやっておくれ」といわれると、「もう、離れたらおあきらめ下さい」と答える失敗の連続、「おどろいたね、だいいち桟橋につかねじゃあねえか」と客に叱られたがどうにもならない。お客は尻をはしより、下駄を持って、舟は初めから嫌だという友人をおんぶして岸に上る。まっ青な顔をしている徳さんに向って、客が「いいかなあ、おーい、若え衆、しっかりしろよ。大丈夫かーい」と言うと、「へっ……へっ……お客さん、おあがりになりましたらねえ……船頭を一人やとってくださいまし」というサゲである。

古川柳に「居候置いて合わずいて合わず」というのがある。「湯屋番」という噺は正にそれで、船徳の主人公とはまるで違っており、その川柳の代表的人物のようだ。道楽者の若旦那が勘当されて、出入りの頭のとこの二階に巣くって何もしない。厄介者であるが、特にこの家の

おかみさんとは犬猿の間柄、「居候三杯目にはそっと出し」なんてしおらしさがない。それで兵糧攻に合うとみえて、「居候としては、お給仕つきでは食いにくいもんだよ」と言うところからも察せられる。ひもじさのあまり、清元の師匠のところへ行って、魚の小骨がのどにひっかかってとれないで困っていると言って、「お師匠さん、すみませんが、まじないに使うのですが、象牙の撥を貸して下さい」と言った。もともとこの師匠には象牙の撥などないことは百も承知なので、そう言われると、師匠はてれくさそうに、「そんなことなどなさらないで、台所で、おまんまの塊りをチョイと呑みこめば、すぐとれますよ」と答える。奴さん、しめたと、台所へ行って、お鉢の中にいっぱい入ったぴかぴか光る銀めしを見て「思わず感涙にむせんだ」とは御亭主に訴えた文句である。

この落語の主人公も、同名異人と思うがその名も徳さんという。どうも落語で道楽者の若旦那の代名詞のようだ。この徳さんが桜湯という湯屋へ奉公に行く。ちょうどそこの御亭主が昼飯時で奥へ行くので、番台に上り、今まで鬱積していたモヤモヤを吹き飛ばすような空想に耽る。色事師としての思い出から、想像をたくましくして独り言をいうところがこの噺のヤマ場で、流し場で、これを見ていた浴客の一人がつい夢中になって聴いているうちに、手拭いを間違えて、軽石で鼻をこすっちゃって、鼻が真赤になってしまった。これこそシマッタと思った

ことだろう。番台の男がこの始末で、お客の履物が間違ってしまう。客が怒ったら、「順にはかせて、いちばんおしまいの人ははだしで帰しますから」というサゲになるのだが、大抵の落語家は、「軽石で鼻をこすっちゃった」で終る場合が多い。またそれで十分効果がある。これは相当うける噺で、この番台での空想的な科白と身振りの色っぽいのがうけるので、独りはしゃいで番台から落ちるのは仕方話、パントマイムの領分に入るのでしょう。

## 「道　灌」

落語では横町の御隠居と、これを訪ねる八ッあんとか熊さんとの対談が実に滑稽で、漫才のやりとりに似ている。

「ご隠居、ひさしくこねーあいだに、でえぶ、うちの模様がかわりましたねえ」と言いながら衝立に眼をやる。「これは戦の絵ですね。だれとだれの戦です？」と尋ねると、隠居は「武田信玄と徳川家康との戦だよ」という。「武田勢は五萬有余、これに対して徳川勢はわずか三千だった」と隠居が説明すると、八ッあんは「てえしたもんだなあ」と驚く。ここで、徳川方には名代の四天王、酒井、榊原、井伊、本多が強かったからだと隠居が答える。「では、武田の四天王というのはあったんですか」と八ッあんが尋ねると、「土屋、内藤、馬場、山県とい

うのがいたんだ」と隠居がまた答える。

四天王の話から、源頼朝の四天王が佐々木、梶原、千葉、三浦で、義経の四天王は亀井、片岡、伊勢、駿河と隠居が学のあるところを示せば、八ッあんも負けずに、「神戸、大阪、京都、名古屋」が新幹線の四天王だとまぜっかえす。これは戦前には「幸手、栗橋、古賀、間間田」は日光街道の四天王だ」と八ッあんが言うと受けたものだ。現在ではいかにも漫才調に「日比谷、浅草、芝、上野」とくりゃあ公園の四天王、「競馬、パチンコ、囲碁、マージャン」とくりゃあ、道楽の四天王だと駄酒落が続く。

次に小野小町の絵を見て、八ッあんが驚く。この美女をものにせんと深草の少将が約束の百夜通い詰めようとしたが、九十九夜のその晩に大雪のために凍えて、ついに思いをとげられなかったという隠居の話に、「やれ、やれ、少々ふかくでしたねえ」と八ッあんが酒落のめす。

最後に、太田道灌が田端の里に狩りくらに行かれた時に、にわかの村雨でお困りになり、付近の農家に立寄られて、雨具を借りたいと乞えば、二八あまりのしずの女が出て来た。隠居のこの話でも八ッあんにはその意味が分からず、「家が古いもんだから巣をつくってやがっただねえ、そいつあ……」というこの対話が面白い。「この乙女が顔を赤らめて、盆の上に山吹の枝を手折って持参し、『おはずかしうございます』と言って道灌公にさし出した絵だ」と隠居

が話すと、八ッあんは「田舎娘というものは駄目だなあ、せめて蓮の葉か、いもの葉でもかぶってご覧なさいとでもいえばいいのに」という。この時、ご家来の豊島刑部という人が道灌公の前に進み出て、昔、兼明親王の古歌に「七重八重花は咲けども山吹の実のひとつだになきぞかなしき」というのがありますが、山吹は花が咲いても実のならぬもの、つまり蓑(みの)のないという断りと存じますと申し上げた。すると道灌公は非常に感じ入り、「ああ、余はまだ歌道に暗いのう」とおっしゃったという。

八ッあんは、この歌は傘を貸すのを断る良いおまじないと考え、その文句をカナで書いて貰って家に帰る。天候が急に怪しくなって、雨が降り出した。雨に濡れて行く人、男も女もいる。巡査も道灌、犬までが道灌だと言って見ていると、友達の一人が飛び込んで来た。待ってましたとばかり、「雨具を借りに来たんだろう」と言えば、その友達は、「いやそうじゃねえーんだ。帰りが遅くなるんで提燈(ちょうちん)なんだ」と言う。「いや、雨具だと言ってくれ、そうしたら提燈を貸すから」と言って、八ッあんが例の歌を出して、読んできかせる。その文句が振っていた。「七重八重花は咲けども山伏の味噌一樽に鍋と釜しき……。どうだ、わかった？」と言えば、「なんだ、こりゃあ、おめえの考えた勝手道具の都々逸？」と友達が言えば、八ッあん、すかさず、「これを知らねえところをみると、よっぽど歌道に暗えな」と言う。「ああ、角が

暗えから提燈を借りに来たんだ」という友達の言葉がサゲになる。なかなか見事なサゲで、風流なところがある。噺家の世界では、こうした俄雨に降られる人のことを道灌という。家路を急ぐお勤め人が道灌となり、最寄りの地下鉄の駅に駈けこむ姿をよく見受けることがある。

道灌も地下鉄ならと走りこみ

## 「野ざらし」

この噺なども今の聴衆には、そのオチがわからないので戸惑うことと思う。それで口演者はあらかじめ、昔は浅草の雷門から南千住へ行く途中に新町というところがあり、その辺に太鼓屋が沢山あったそうですということ、また、太鼓の皮が馬の皮で作ったものだということ、幇間、つまり、たいこもちを略してたいこと言っていたことを説明する必要がある。

釣というものは子供の頃から興味を持つもので、昔は今日のように道楽（娯楽）が少なかったので、付近の川で釣をする人をよく見かけたものである。ここは誰もいないから、いい穴場だろうと竿をおろしていると、近所の人が通りかかって、「ここで釣れるんですか」と尋ねると、「未だあんまり食わないんですよ」と釣っている男が答える。「そうでしょう、そこはきのうの雨で水がたまったんですから……」という返事が帰って来た。

壁を隔てて、隣に住んでいる尾形という浪人の老先生のところから、昨晩若い女の声が聞こえて来て、眠りを妨げられた八ッあんが翌日早速先生のところへ出かけて行って、昨晩のおやすくない対話のことを訊問したところ、釣好きな先生が昨日向島へ釣に出かけたが、魔日というか、雑魚一ぴきかからない。これは殺生をしてはならぬという戒めかと釣竿を巻き、帰りかけたところ、傍の葭がガサガサッと動いたので、その葭の中を見ると、野ざらしの人骨があったので、死者の冥福を祈って携えた瓢の酒をその骨にかけてやった。心なしか、それが赤味をおびた。よい功徳をしたと帰宅したが、夜半にあの娘（その骨の主）が礼に来たんだと説明する。これを聞くと、八ッあんは言う、「釣とは表向き、浪人尾形清十郎先生も、すみにはおけませんね」と。「わっしにも美人を釣らしてもらいてー」と言って、無理矢理に先生秘蔵の竿を借りて向島に出かける。

河岸にはずらっと釣師が並んでいる。そこへ、八ッあん、酒の二、三合を用意して、その釣師の列に割りこもうとして、「娘か、年増か、乳母さん？、芸者？、花魁？、何の骨だい」とどなりちらし、「鐘がぼんと鳴りやさあ、上げ潮、南風さ、烏がとーびだしや、こりやさのさ、骨があーるーいさい」と浮かれ出し、果ては水面を竿でぐるぐるかき廻してしまう。

「パーッと烏が飛び出す」のところは八ッあんはもちろん、お客様が固唾をのむところで、

尾形先生の話っ振りは怪談調で、一種の緊張感を与える効果がある。早慶野球戦の華やかなりし頃、NHKの名アナウンサーの松内則三氏が神宮の森から烏を舞い上がらせた効果を思い出させる。

そうこうするうちに、日も傾き、尾形先生にあやかろうと、八ッあんは葭の中の野ざらしの人骨？　に酒をなみなみとかけて、「おれの家は浅草門跡さまのうらで、八百屋の横町をはいって角から三軒目だよ」と念を押して帰る。夜になって、「向島からまいりました」という声と共に変な男が入って来た。八ッあんが「お前は何者だ？」というと、「こうみえても、新朝という幇間です」と言う。「なに、新町の太鼓？、おお、しまった、それじゃあ、葭の中のは馬の骨だった」

この噺では尾形先生が、しかつめらしい顔で八ッあんに向島の風景やら、いんにこもった鐘の音まで聞かせたりする神妙な態度に反して、傍若無人な八ッあんの振舞が好対照で、正に漫画的な効果がある。先代柳好の十八番。サゲの新朝という幇間だという時に、速記本では朝と町が同音異字であることが了解出来るが、口演では分らない。

この噺のサゲは、要するに大した効果のあるものとはいえない。噺の妙味は八ッあんが空想に駆りたてられて、「鐘がボーンと鳴りゃさ、上げ潮南風さ」と歌い出して、あのコミカルな

行動へと弾みがつく。あの嘘つき弥次郎のごとき、千三のような嘘から嘘へと積み重って雪崩落ちる話の運びは、品川の師匠の橘家円蔵の芸風であった。

落語の筋には嘘を土台とするものが相当にある。廓話とか世間一般の色恋には、とかく手練手管、色里でよく言われる、「傾城の恋はまことの恋ならず、金持って来いがほんの恋なり」というのが今も昔も変らぬ人情、これが話のネタになるのは当然であろう。従って、幇間の出る噺がかなりある。例えば、「鰻の幇間」とか、「太鼓腹」はポピュラーだ。過日横浜駅前のスカイビルの木曜寄席で、春風亭小朝の「太鼓腹」を聴いて、上手になったなあーと感心した。昔評判だった古今亭今輔のこの噺を聴いたことがあるが、今輔のは、針をさされて真紅になった腹をかかえて泣きッ面になる仕草がうけたのであるが、小朝の幇間は、色気の点で遥かに優れていると思った。

## 「千早振る」

大相撲は、今日では年に六回、一興行十五日間となっているが、昔は晴天十日で、国技館のような本建築でない所では小屋掛けで、途中で雨になると、「入れ掛け」となったものである。

この「千早振る」という噺は、いわゆる「無学者論に負けず」で知ったかぶりをする先生と八ッあんとの珍問答であるが、この八ッあんが娘から百人一首にある在原業平の歌、「千早振る神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは」の意味をきかれて、さっぱり分からないので、これじゃぁ夜逃げでもしなけりゃぁ駄目かと、一時は諦めたが、横町の物知り先生を訪ねて教えて貰おうということになった。ところが、先生は、これは業平の歌だねと言いながら、その意味が分らないのでチャランポランの解釈をする。

第一に、竜田川というのは関取の名だというのが面白い。この力士は江戸時代に活躍して大関にまでなったんでねと言う。ここですでにひどい時代錯誤がある。業平は御存知、六歌仙の一人で、九世紀頃の人だから、江戸時代と言えば十七世紀以降になるから関取の竜田川など知るよしもない。

「千早振る神代もきかず」の千早を、吉原の花魁に見立て、神代をその妹女郎に仕立てたところなんぞは妙な粋人である。

五年間神に願をかけて大関になった竜田川が、一度吉原で遊んでみたいと登楼したが、千早花魁には振られ、妹女郎の神代にまでウッチャリを食って、すっかり悲感し、ごひいき様のいる江戸を去って故郷に帰り、豆腐屋を営んでいたが、ある日のこと、一人の女乞食が店先に来

て、「幾日も物を食べていませんのでオカラをめぐんで下さい」と乞うた時、竜田川はその女の顔を見てびっくりした。それはあの千早なのだ。江戸で恥をかかされたそんな女にやるようなものはないと断れば、女はその家の前にあった井戸に身を投げて死んだという哀れな因縁話をする。

八ッあんには、千早に振られ、神代にまで知らん顔をされたので、竜田川がオカラをやらなかったため、千早のなれの果ての女乞食が入水したのだということはどうやら理解出来たが、最後の「とは」というのが分からないと言えば、流石の物知り先生も言葉につまり、結局、苦しまぎれに、「とはというのは、実は千早の本名さ」と言う頓智がサゲになっている。

例の「崇徳院」の場合のサゲの「割れても末は買わんとぞ思う」よりすっきりしているし、また話の運びが芝居がかっていて人情噺風でもある。

「つくばねのみねよりおつるみなのがはこひぞつもりてふちとなりぬる」というこれまた百人一首、第五十七代の天皇、陽成院の御歌を物知り先生が「つくばね」と「みなのがは」を力士に見立て、同じような迷解釈をして、「恋ぞつもりてふちとなりぬる」を昔は、力士は大名のお抱えであったので、勝負に勝って喝采の声がつのり、ふち（扶持）、つまり、御手当を頂いたのだと解し、恋と声とを混同しているのが面白い。この場合、「つくばね」も「みなのがは」

も共に力士名としてリアルで、「千早振る」のマクラに使うことがある。

## 「目黒のさんま」

秋の風物、竜田川の紅葉は眼を楽しませるものだが、江戸ッ子の秋の味覚はさんまであろう。「目には青葉山ほととぎす初鰹」というのは初夏の風物で良いコントラストになっている。

「目黒のさんま」という噺は余りにも有名で、道灌公のように、目黒の里へ狩に行かれたあるお大名が、さんざ馬を走らせて狩に熱中しているうちに、空腹を覚えた時、どこぞ農家から魚を焼いている香が流れて来て、その大名の鼻を刺戟したので、家来の者にその農家を訪ねさせて、その焼魚を所望し、舌鼓をうった。「さんま」という名をきくのも初めて、大変御満足になって御帰館になった。

その後、ある時、あの「さんま」の味が忘れられず、御家来に所望すると、さあ、大変。家来衆が魚河岸へ行って「さんま」を買って来たが、その料理法をわきまえないので、苦心した。それで、まずこれを蒸し、すっかり小骨をとって、御前に差し上げたところ、殿様が、まず一口、それを召し上がって驚いた。「なんて、これはまずいのじゃ、さんまは目黒に限るのー」と言ったというお笑いである。

筆者も、戦時中、昭和十四年の夏、文部省の主催で、興亜勤労報国隊に参加して、皇軍慰問のため学生を連れて北支蒙疆へ行った折、当時張河口で蓮沼師団長指揮下の皇軍から、一夕御招待をうけて御馳走になったことがあった。それはその町でも相当な料亭で、料理はもちろん中華料理であったが、その宴が終って会場から出て来た時、たまたま早稲田の後輩で、横浜伊勢佐木町通りの中華料理店で有名な博雅亭の評判娘と結婚したS君が私を呼びとめて、「先生どうですここの料理は?、中華料理は何といってもハマのが良いでしょう」と言った。全くその通りだと思った。これは身びいきではなく正直のところだ。

またある時、自分の関係していた学校の懇親会に招待され、東京目黒の雅叙園で中華料理を御馳走になり、挨拶をもとめられた時、まず御主人側に御礼を述べたついでに、つい、「今夕の御料理は正に目黒のさんまというところですねー」と、口を滑らしてしまった。

近頃では、料理の粋というので、中華料理が到る所で繁昌しているが、浜ッ子の私は「中華は山下町で」といつも宣伝している。これは自己宣伝かな……。

## 「芝　浜」

この「芝浜」という古典落語は人情噺でもあり、劇的要素がある。同工異曲の「文七元結」

という人情噺が劇化されて歌舞伎の舞台に上演されているのは御存知でしょう。

この「芝浜」の主人公は芝の金杉に住む魚屋の金さん。「文七元結」の主人公は長兵衛という左官。共に腕はいいが、前者は酒、後者は酒と博奕が大好きのためいつも貧乏暮らし、歌舞伎で「文七元結」の長兵衛は尾上松緑君の当り役で好評を博しているが、それはしばらく措いて、話を「芝浜」に移そう。

金さんは酒をくらって仕事をサボっていたが、女房に「もう、十日も商売を休んでるんじゃないか、歳末も近いってのにどうするつもりなんだい？」とせっつかられて、芝浜の魚河岸（むかしは大きな魚河岸は日本橋にあった）へ出かけたが、いやに薄暗く、おまけに問屋が一軒もおきていなかった。「暗れえはずだ。かかあのやつ、そそっかしいので、時刻をまちがえて早くおこしやがったのだな」とぶつぶつ言いながら浜へ出て、「磯の香りってやつだ。いい気持だなあ……どれ、顔でもあらうとしようか」と言って、久し振りに浜をなつかしそうにぶらぶらやって来ると、何か足にひっかかるものがあるので、取り上げて見ると革の財布、中を調らべると五十両という大金が入っていた。驚くやら、嬉しいやらで、家へ急いで帰ると、女房に、「当分商売はお休みだ。辰公、八公、寅んべ達を呼んで祝い酒だ」と言って、仲間を呼んでこさせ、飲めや唄えやの大さわぎ、果ては、酔いつぶれて、金さんは前後不覚に寝てしま

った。翌朝、女房に、「商売だよ、起きておくれ」とせきたてられると、金さんは狐につままれたようにポカンとなりながらも、芝浜で確かに小判で五十両を拾って来たんだと抗議したが駄目。やっぱり、これは酒を飲んで寝た夢だったのかと観念して、酒をぶッつり止め、それからはせっせと働くようになった。

裏長屋住いの棒手ふりの魚屋の金さんも、その努力の甲斐あって、表通りに小さいながらも店をだすことが出来るようになった。

ちょうど三年目の大晦日の晩、かたずけものもようやくすんで、くつろぐと、「こうやって畳をとりかえた座敷で正月をむかえられるなんて……、昔からよく言うじゃねえか、畳の新しいのと、かかあの新しいのは、……、いや、かかあは古いのがいいなあ」とてれていると、女房から革の財布と中身の五十両とを見せられて、「三年前に、あんたが芝浜で拾って来たもんだよ、あれは夢じゃなかったの、けれど、大家さんところへ相談に行ったら、拾ったものをお上に届けないでは駄目だと言われて、お届けして貰い、それがおさげ渡しになったんですよ。今まで心を鬼にしてかくしていてすみませんでした」と女房にわびを言われると、金さんは、「こうして気楽に正月をむかえることが出来るのは全くお前のおかげだ」と妻君に感謝するのであった。すると、女房が、「えゝ、お酒かい？、お燗もついているから……」と言うと、金

さん、「ではこの湯飲みにたのまあー」と言ったが、「待てよ……、よそう、また夢になるといけねえ」というサゲである。

この噺はあくまで、はじめの貧乏生活から店をもてるようになった境遇の変化を、この夫婦の対話できかせる話芸であるが、「文七元結」では左官夫婦も文字通り赤貧洗うがごとくで、暮が越せないので夫婦喧嘩がたえない。これを見かねた娘のお久が、両親に相談もせず、独りで、吉原の佐野槌という父親の出入りしている妓楼に自分を抱えてもらいたいと頼みに行ったことが、先方のお内儀さんからよこした使の藤吉という番頭から聞いて分かった。

長兵衛は自分の着ていた法被を女房に着せ、自分は女房が今まで着ていたものを脱がせて、それを着、その上に藤吉の羽織を借用して、佐野槌へ行く。お内儀からは、散々この親孝行な娘に対しても真面目に働らかなきゃぁいけないよとさとされ、暮を切り抜けるに入用な五十両を借りて帰る。その途中、吾妻橋で、今戻って来た吉原の方を眺めながら、つくづくと、「お久、辛抱してくれ、〈すすりあげ〉俺はキッと来年の秋ごろまでには、稼いでお前を家につれてくるようにするからな」と心に誓いながら橋を渡ろうとすると、若いお店者が身投げをしようとするのを見付け、これを抱きとめ、仔細を聴いて、身につまされ、本人の名前はおろか、その奉公先の店の名をもきかずに、娘の身の代金の五十両を投げつけるように、その若者に与

えて、家に帰れば、女房は、その大事な金を持って帰らぬので、またもや大立ち廻りの喧嘩をはじめた。すると、翌日、昨晩助けてやった若者（その名を文七という）の御主人、並に番頭が長兵衛宅を訪れ、「昨晩、文七が奪られたと思った金の五十両は、彼が小梅の水戸様で受取ったのですが、それを、つい好きな囲碁をしている間に、碁盤の下に置き忘れて来たことが、水戸様の方からその金が届けられて、分かりました。文七の生命の親である長兵衛さんのお宅に伺って、そのお礼を申し上げたいのです」と言った。文七の主人というのは横山町で鼈甲問屋を営む近江屋卯兵衛という人でした。この御主人が佐野槌からお久を身受けして下さった。それは、日頃目をかけていた文七には店を一軒もたせてやりたいと思っていたので、この際、文七の嫁にお久さんを頂きたいと所望し、ここにめでたく、文七とお久は夫婦となり、麹町の貝坂に元結屋の店を一軒開いたというお噺。最後の場面で、刺青ぞろい、三枚、出来たての四つ手駕籠が路地に入って来て、駕籠屋がすっと垂をあげると、中から娘のお久が昨日とは打って変り、文金の高島田、お召の着物に繻子の帯、すっかりお化粧をして現れる。実にきれいだ。「お久が帰った」と言われて、あまりの嬉しさから、「おや帰ったかいッ」と言って、おふくろさんが立ち上ったが、ぐるッつと振り向いたらお尻が丸出し、きまりが悪いが親子の対面だ。恥かしさを忘れ、抱擁して泣くばかりだった、これは話芸だけでは到底描写出来ない場面だ。

ここは舞台での演出によらなければ駄目、長兵衛が佐野槌のお内儀に諄々と説教され、平身低頭で引きさがる時、足がしびれて、満足に立ち上がって歩くことが出来ず、びっこをひいて引っこむ仕草を、松緑君は見事に演じていた。実に素晴らしい演技だった。素晴らしいと言えば、故六代目三遊亭円生師が、この噺に出る三人の女性（左官の女房、佐野槌のお内儀とお久）を三様に描写した口演は実に推賞に値するものであった。

## 初夢

昔、江戸の町を「お宝」「お宝」と叫んで正月の二日の晩に見る初夢の宝船を画いた紙を売り歩く商売があった。その画には「なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」という歌が書いてあった。上から読んでも下から読んでも同じ文句、山本山のコマーシャルみたいだ。

良い夢を見たいというのはユートピア精神である。街頭で宝くじを買う人が長蛇の列を造る

のも一攫千金を夢みるからである。マンモス化した都会から脱出するのはエキゾダスだ。脱出と云えば、アーヴィング作のリップバンウィンクルは女房の尻にしかれて苦しんだ男が愛犬を連れて猟のためにキャツキル山中に分け入り、古いオランダ服を着た小人に出逢い、酒の馳走になり、酔いつぶれて眠ってしまった。眼がさめてみると、二十年の歳月が流れていた。脱出の時オランダ領だったその土地に英国旗が飜り、自分の妻君をはじめ知人の大方はもういなくなっていたという西洋浦島物語である。因に、この物語の山中でゴロゴロと雷鳴の轟くのは小人達がナインピンズの遊戯に耽っているのだという。当今流行のボウリングの御先祖様だったのかも知れない。

二日の朝雑煮を祝う。清酒とブランデーを少々きこしめして陶然となり、炬燵に入って、しばしまどろむ。然し宝くじの当った夢は遂に見れなかった。眠る前に意地穢くもつまんだ和蘭からの輸入だというウイスキー入りチョコレートのせいか、フライングダッチマン（その昔希望峰付近に出没したという幽霊船）のことが妙に頭に浮んだ。インフレ丸に便乗して、どん慾の帆を満々と張って人生航路を走ったら幽霊船を見た船員と同じ運命に遭遇するに相違ない。

地上に宝を積むとは餓鬼道と見つけたり。

（日立京浜工業専門学院「坂道」所蔵　昭和四十七年）

# 英文学こぼれ話（講演）

——昭和五十七年十二月煙洲会——

## まくら（プロローグ）

自分は、厳密な意味で、英文学研究者などといえるものではありません。まあ、おちこぼれ者といったところです。従って、今夕の講演はおちこぼれ者のこぼれ話でしょう。

あの有名なフランスの画家、フランソア・ミレーの傑作に、「落穂拾ひ」というのがあります。農婦が落穂を拾っている田園風景です。あの「晩鐘」と共に、お馴染な名画です。あの名画「落穂拾ひ」のように、手前のこぼれ話を、適当に拾ってお聴きとり頂ければ幸いです。

ミレーの話が出ましたので、落語のマクラのように、プロローグとして、ちょっと思い出話をしますと、例の関東大震災の翌年（一九二四年）に、私が米英に留学しましたとき、ロンドン大学滞在中、クリスマス休暇を利用して、フランスとイタリーを旅行しました。そのとき、

パリで、ヴェルサイユ宮殿、ノートルダム寺院、ルーヴル博物館等を見物したり、第一次世界大戦の遺跡で有名なヒンデンブルグ戦線を視察した後、ナポレオンが愛好した離宮のあるフォンテンブロー（パリの南南東約三十五哩、セーヌ河の左岸に近い）へ行ったことがありました。

トマス・クックの観光客数名と、同じ車でホテルを出ました。途中、坦々たる真直ぐの路に出ました。ここは一九〇四年にパリでオリンピックが開催されたとき、マラソンコースとして使用されたとのことでした。私共は二十年振りに、そのコースを車で走っていた訳です。路傍の並木には寄生木（やどりぎ）がかかっていました。これを見ると、ガイドは、「ここを通るときは、御婦人は注意して下さい」といって笑った。それはクリスマスの季節に、寄生木のかかっている木の下に御婦人が立っていたら、誰でも接吻してよいという慣習があるからでした。その後、ある英字新聞の「親父教育」という漫画でクリスマスのシーズンに、一人の若い女性が列車で旅行中、彼女の上の網棚には、カバンが一個のせてある。そして、それに彼女の名前のイニシアル、D・Oという文字が見え、その網棚から寄生木（ミッスルトウ）がぶらさがっている図が描かれていました。

さて、フォンテンブロウの森の付近にはバルビゾンという村がある。この村は前述のミレー

をはじめ、近代のフランスで著名な芸術家達が住んでいたところです。また、イギリスの文豪オスカー・ワイルドも住んでいたそうです。彼はウインダミア夫人の扇とか、聖書から取材したサロメというドラマを書いて有名ですが、特に、サロメは元フランス語で書かれたもので、名女優サラ・ベルナールがサロメを演じて好評を博しました。わが国では松井須磨子がサロメ、沢田正二郎が予言者ヨハネという配役で評判をとった、私もこの芝居を横浜で観たことがあります。

私は学生時代、自然主義文学の盛んな頃、芸術至上主義を主唱する彼の「芸術家は美なるものの創始者なり」という言葉が好きだった。彼は仲々のお洒落で、大きな日まわりの花をバトン・ホールにつけてロンドン市中を濶歩したという。例のホモ事件でロンドン郊外レディング(Reading)刑務所で二年間実刑に服した、その獄中で書いたのが有名な「獄中記」(De profundis)です。

フォンテンブロー宮殿では丁度、ナポレオン一代記という映画の撮影中だった。

ところで、この離宮で皇帝ナポレオンは王妃ジョセフィンと最後の幾日かを共に暮した。ジョセフィンは、ここからマル・メイゾン(パリの西約七哩のところにある彼女の居城)に立ち戻ったとき、皇帝から正式の離婚状が届けられていた。彼女がフォンテンブローからの帰途、

乗った馬車はオパールの車と称して不吉なものとされている。

ジョセフィンは仲々の美人だったようです。彼女は微笑するとき、ハンケチで口許を被う癖があった。宮廷の貴婦人連は、その愛くるしい仕草を見習って、それが流行したという。これに似た話は、中国の春秋時代に、呉王夫差の愛妃が、胸の患いがあって、よく手を胸におき、顔をしかめたのが愛苦しい表情に見えたので、他の婦人達がこれを真似たという顰蹙（ひんしゅく）の故事に似ています。

マクラがつい長くなったので、この辺で本論に入ることにします。

イギリス文学を語るとき、まず、二つのテーマをとり上げなくてはなりません。一つはキリスト教の布教です。西暦五六三年頃、アイルランドからセント・コロンバという僧侶が十二名の弟子を連れて、スコットランドの北西部にあるインナー・ヒブリディーズ諸島（一五〇程ある小さな島）中のアイオナへ渡り、修道院を建て布教をはじめた。また一方、西暦五九七年頃、法皇グレゴリ一世のとき、あの有名なセント・オーガスティンと修道僧四〇名がイギリスに派遣された。彼等はドゥヴァの北、エブスフリートに上陸して、キャベリに修道院を建て布教を開始した。かくしてキリスト教は北から、南から布教された。

キリスト教の布教と共に、南部ではキャンタベリ、北部ではヨーク（大聖堂のある）の北、

ホイットビーとが学問の府となった。因に、このホイットビーはあの探検家キャプテンクックがここで建造された船で世界一周に乗り出したところです。

次は英語というテーマですが、英語は、古代、中世、近世の三つに区分される。

古代英語は八世紀頃から一一五〇年頃まで、中世英語は一一五〇年頃から十六世紀まで、そして、近世英語は十六世紀から現代までということになる。

イギリス最古の詩は古代英語で書かれたベオウルフという叙事詩です。これはアングロ・サクスンの伝説ではなく、スカンディナヴィアの伝説であります。

ベオウルフという若い勇士が、デーン人の王様ロトガーに招かれ、彼の廷臣達を殺す怪物グレンデル（付近の湖水に棲んでいた）を退治する話であります。この古典のマニュスクリプト（写本）は現在大英博物館に所蔵されています。

御承知の如く、イギリスにはブリトン人が先住していましたが、ゲルマン民族のアングルズサクスンズ、ジューツの三種族が、イギリス北部、中部、南部に夫々侵入して来た。

さて、古典の研究は、先にもちょっと触れましたが、左の四系統の文献によってなされております。

㈠　今日大英博物館にあるサー・ロバート・コトン蒐集のもの。

㈡　一〇五〇年頃、リーフリック司教によりエキセター大聖堂へ寄進されたエキセター本。

㈢　一八二二年イタリーのミラノ付近のヴァチェリで発見されたもの。

㈣　オックスフォドのボードリアン・ライブラリ所蔵のもので、アランデル伯の図書館員でオランダ学者のフランシス・デュジョン（ジュニスともいう）から寄贈されたもの。

次に、ノルマンの征服は、ウィリアム征服王が一〇六六年に、イギリスの南部に進攻して、ヘイステングズでサクスン王ハロルドを殺して、ノルマン王国を樹立した。従って、当座は、宮廷及び法廷ではフランス語並びにラテン語が公用語でありましたが、だんだん、土着の住民の言葉が優先するようになった。

次は中世語で書かれたキャンタベリ・テールズのことを話しましょう。これはヂェフリ・チョーサー（一三四〇―一四〇〇年）の傑作で、大部分がヘロイック・カプレットで書かれた一七〇〇〇行にも及ぶ長い叙事詩であります。そのプロローグは、その時代背景を生々と描いた興味深いものです。

この詩を書いたチョーサーは富裕なロンドンの酒商の息子で、十七歳にして宮廷で小姓をつとめ、十九歳のとき、エドワード三世の軍に投じて、フランスに遠征しましたが、二十歳のとき俘虜となり、身代金を支払って救出されたこともあった。また、三十二、三歳の頃（一三七

二―三年）には使節としてイタリーのジェノアやフロレンスに行き、文豪のボカッチョやペトラルカに逢っている。チョーサーの傑作キャンタベリ・テールズはボカッチョのデカメロン（十日物語）からヒントを得たものだという。

キャンタベリ物語は、キャンタベリへ参詣する巡礼達の語る話で、ロンドン郊外のサザークのタバードインという旅宿に集合した三十名の巡礼達が作者のチョーサーと都合三十一名で、馬を仕立て、行程一〇〇キロの旅に出かけ、往復に各自の体験談を語り、最も面白い話をした人に、タバードインの亭主が、旅から戻って来たら御馳走するという趣向になっている。結局話は全部で二十三しかない。巡礼の中には、騎士や郷士、商人や職人、坊さんもおれば女性もいる。

ところで、このキャンタベリの大聖堂は殉教者、トマス・ア・ベケットを祠っているお寺ですが、この聖者のことを語る前に、彼の父、ギルバートのことから話を進めましょう。

当時、聖地への巡礼が盛んであったことは御存知と思いますが、相当危険が伴ったようです。ギルバートは、聖地への巡礼中、サラセンの貴族のために捕えられて奴隷になりました。たまたま、その貴族の姫君に見染められ、二人は相思相愛の仲になり、ギルバートは暫らく滞在することとなったが、ロンドンには立派な店を持っているギルバートとしては帰心矢の如

く、姫を促して一緒に脱出しようとしたが、駄目で、自分独り帰国しなければならなかった。あとに残された姫は、愛するギルバートが恋しくて、遂にその邸を出たが、知っている英語といっては、愛人の名とロンドンという地名だけだった。先ずある港からやっとロンドン行きの便船に乗り、ロンドンへ着いたが、あとはギルバートを探すのが一難儀だった。彼女はロンドンの街々を「ギルバート、ギルバート」と叫びながら狂気のように探し廻った。偶然、ギルバートの店の番頭が、窓外に、「ギルバート、ギルバート」を連呼して、妙齢の婦人が狂人のように走り廻っているのを見かけて、主人を呼ぶと、それが最愛の姫であることを知って、ギルバートは往来に飛び出し、彼女を店に迎え入れ、正式に彼女と結婚した。そしてこの夫婦の間に生れたのがトマスでした。

トマスは稀に見る偉大な人物になる。彼はキャンタベリの大司教に仕える秘書から立身する。

国王ヘンリ二世は彼の才腕を認め、大蔵大臣にまで登用して、国家の財政建直しをやらせた。このトマス・ア・ベケットとヘンリ二世との関係は、映画化されたことがありますので、あるいは御覧になった方もあるかと存じます。

たまたま、キャンタベリの大司教が逝去され、その席が空いたとき、ヘンリ二世は彼をそ

の後釜に据えた。それは、国王の腹では、彼を大司教にすれば、イギリス教会に対する実権を自分の手に握るばかりか、ローマ法皇に対してもまた、なにかと有利な立場になると考えたからであった。しかし、その思惑は外れ、トマスが大司教になっても、今まで手古ずって来た聖職者に対する裁判権を国王に返すどころか、事毎に楯つくようになった。案に相違した国王は、ある日、腹心の騎士四名に、「今まであれほど面倒を見てやったトマスの奴、全く怪しからん、目の上の瘤だ、彼奴さえいなければ……」と愚痴をこぼした。なにしろ、血気に逸る騎士達のことですから、早速、甲冑に身をかためてキャンタベリへと馬を飛ばした。寺僧たちは、「大司教さま、何卒、お館の方へ避難なさって下さい」と促したが、大司教は、「今は夕べの祈禱のときだ。心配するな」と言って、少しも動ずる色なく、十字架の権標を寺僧に捧持させて祭壇の前に進んだ。乱入した四名の騎士はバラ〳〵と、トマス・ア・ベケットを取り囲んで、彼を滅多斬りにした。西暦一一七〇年、十二月二十九日のことであった。

トマスの殉教によって、キャンタベリ大聖堂の名声はいよ〳〵高く、ヘンリ二世も、さすがに慚愧の念にかられ、自らこの大聖堂に参詣して、懺悔のために、自分の身体に幾度も笞を打たせたとのことである。

因に、一一七二年には、トマス・ア・ベケットは聖別されて聖者となった。

ヘンリ二世の三男、リチャード一世は、例の獅子心王（ライオンハーテッド）という異名のある豪雄で、第三次十字軍（一一八九年）のとき聖地へ遠征して、相当の働きをしたが、フランス王フィリップと犬猿の間柄であったため、共同の作戦行動がうまく行かず、已むなくサラセン王と和議を結んで帰国の途にのぼらんとして、オーストリアで捕らえられ、暫らく幽閉され、莫大な身代金を支払って、やっと帰国出来たという数奇な運命の王であった。

これに反して、イギリスに残っていた末っ子のジョンは、兄の留守にその位を奪って横暴の振舞が多かった。そのために豪族に強制された例のマグナ・カルタ、つまり大憲章（グレイトチャーター）に調印させられ、その王権が縮小された。これが抑々、イギリス憲法の基礎である。ヘンリ二世は、リチャードやジョンのいずれにも反かれた不幸な国王であった。

ジョン王については、シェークスピアの国史劇（クロニクルプレイズ）で取扱われているので、近年屢々上演されていますが、これらの国史劇を時代順に言うと、ジョン王、リチャード二世、ヘンリ四世（一部と二部）、その第一部は本年ＮＨＫから放映されたが、登場人物中、フォールスタフというビヤ樽の化物のような肥満（ふとっちょ）の人物は沙翁の創造した男で、喜劇の王様と呼ばれている。次がヘンリ五世（英国王の中でも英雄として尊敬されている）、ヘンリ六世（一部、二部、三部）では、第一部でフランスのジャンヌダルクが活躍する場面がある。その次はリチャード三世（せ

むし男で、歌舞伎の中村勘三郎君が好演した）とヘンリ八世、の都合七篇、十部である。

ところで、前述したジョン王の大憲章（西暦一二一五年）のことはドラマの中では触れておりませんのは、国王と豪族達との権力闘争であって、ローマ法皇対英国王の争いと、英仏両国間の領地争いとは当然別箇に取扱わるべき大きなテーマであったからだと思う。

例の英仏の百年戦争は、英王エドワード三世（一三二七年―一三七七年）からヘンリ六世（一四二二年―一四六一年）の間に戦われた。だから沙翁の国史劇ではリチャード二世からヘンリ六世までは百年戦争のことになる。ヘンリ六世の第一部では前記フランスのプセル（ジャンヌダルク）とイギリスの勇将タルボット父子の活躍とが面白く描かれている。

ところで、前に述べましたキャンタベリ物語は、ウィリアム・キャックストン（一四二二年―九一年）の印刷所（ウエストミンスターにあった）で印刷されました。

また、このチョーサーの詩は中世英語で書かれたものですから、その語彙を参照しないと仲々読みにくいものです。

さて近代英語は十六世紀以降の英語ですが、わが国にはいつ頃から入って来たものでしょうか。

慶長五年（一六〇〇年）にオランダ船のリーフデ号が九州の豊後に漂着したとき、この船に

英人のウィリアム・アダムズが乗っていた。これが例の三浦安針として知られております。水先案内人でした。彼は慶長五年の三月に大阪で徳川家康に謁見している。この年、西暦一六〇〇年は沙翁がジューリアス・シーザーや、アズ・ユウ・ライク・イット（御気に召すまま）を書いた彼の油の乗った時代であり、また、東印度商会創立の年でもありました。これはイギリスが将来七つの海を支配するキッカケとなった貿易の記念すべき年でもあった。この慶長五年の九月には例の関ヶ原の戦がある。

西暦一六一六年、つまり、元和二年の四月には家康が七十五歳で没している。沙翁も同年四月二十三日に亡くなっている。五十二歳だった。同年といえば、西班牙の文豪、ドンキホーテの作者セルヴァンテスも一六一六年に他界した。

話をそろそろ幕末に移しましょう。西暦一八五三年（嘉永六年）六月三日にアメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが遣日国使とし軍艦四隻を率いて浦賀に来航、翌年（安政元年）一月十六日、ペリーが今度は軍艦七隻を率いて神奈川沖に来泊、三月三日には幕府と日米和親条約（神奈川条約）を締結調印した。このアメリカ艦隊の来航は、わが国との通商問題、特に捕鯨船団のために燃料や水の補給がその重要な目的の一つであった。それで日米親善に役立ったのは、春秋の筆法を以てすれば、金華山沖の鯨が取り持つ縁だという人もある。今日、わが国は

捕鯨問題で各国から苛められているが、当時、アメリカは捕鯨国として活躍しており、文学でも御存知のハーマン・メルヴィルの傑作、モウビイ・ディック（白鯨）という小説は、あの巨大な鯨を追う船乗りの不屈な精神を描いたもので、かつて映画化され評判だった。

神奈川条約が締結調印された場所は山下町の横浜海岸教会の隣で、元のイギリス領事館のあった辺でした。この領事館前にあった玉楠の木は、昔外国船の入港の際、上陸目標（ランドマーク）だったそうです。この記念すべき木は、関東大震災のときに焼けましたが、不思議と芽をふき返し、今では立派な木になっております。

しかし、その領事館は、今日では横浜開港資料館となっております。港の見える丘の大仏記念館と共にハマの名所となりました。

現在のシルク・センターのところには、ジャーデン・マセスンというイギリス商人の経営していた英一番という赤い門構えの建物がありました。メリケン波止場の大桟橋には今日のような上屋はなく、閑散たるものでした。

大震災の数年前に、ロンドンのエデュケーショナル・ブック・カンパニー発行のハームズワースのエンサイクロピデアという十二巻からなる百科全書が丸善を代理店として発売されましたとき、自分も、この手軽な百科全書を購入して、早速、横浜という項を見ますと、横浜港の

メリケン波止場と税関の写真が掲載されておりました。人口は当時四十三万となっていました。少年時代の私はよくこの波止場に遊びに行ったものです。遊びに行くといえば、山手の外人墓地（当時は異人墓と称した）の辺をブラつくのが楽しみで、外人の家からピアノの音が洩れて来るのが如何にも夢のようでもあり、また、外人の子供がゴムのタイヤの三輪車を乗りまわしているのが、うらやましかったものです。

あの山手をBluff（ブラフ）と呼んでいますが、イギリスの海岸には、ああした地形が多いようです。煙洲先生が以前にお住いになったお宅の裏山の根岸台に住んでいた米人は東京湾のことをミシシッピイ・ベイと呼んでいたのも故郷忘じ難しといったところでしょう。

さて、ブラフという言葉で思い出すのは、ポーカーというカード・ゲィムで、自分の手を強く思わせることをブラフというそうです。つまり、山かんとか虚勢を張ることです。

私が初めてイギリスへ行きまして、ウインザーの宮殿を見物したとき、国王や貴族のポートレイトの飾ってある部屋を通った折、ヘンリ八世の肖像画の前に来ると、案内人は、「このヘンリ八世という王様はお妃を変えること六度に及んだというブラフ・キングでした」と説明したのには驚きました。日本でしたら不敬罪に問われるところです。事実、二度目のお妃キャザリンを離婚するときには大騒ぎでした。キャザリンは西班牙の皇女でカトリックでしたから、

ローマ法皇の許可がなければ、離婚は許されませんでした。こういうことがイギリスと西班牙とが不和になる一つの原因で、アルマダ艦隊が来襲したのもそのためでした。芸能人の離婚問題のようにはゆきません。

私共ハマ育ちの者にとりましては、前に申しましたメリケン波止場とかブラフというのは異国情緒があって、海外への憧憬のいわば口火になっておりました。従って、本町や弁天通りや元町の横文字の看板には、意味も分らず目がとまりました。もっとも、当時の横文字には怪しげな綴りのものがあったらしく銀座通りの商店の看板に、眼に余る誤りのある看板に対して、訂正するようにとその筋からお達しがあったとき、在留外人から、「あれは目の保養になるから、そのままにしておいて欲しい」という横槍が入ったそうです。

また、故意に綴字を間違えて、人の目を惹いたというヒューモラスな例もありました。

私が関東大震災の直後、山下町の横浜海岸教会の前をブラ〳〵歩いておりますと、バラック建の喫茶店の看板に、コフイ・アンド・ケイクスという文字のケイクスの綴りが cakes でなく、地震の quakes となっているのを見て、思わず笑ったことがありました。これなどは故意に綴りを間違えたヒューマーでした。

こうした文字の遊びは、昔、お祭で、町内に地口行燈が掲げられ、町行く人の目を楽しませ

たものです。英語では地口のことをパン（pun）といいますが、沙翁劇の面白味の一つはこの地口が登場人物の科白のやりとりの間に出て来ることです。御存知ハムレットの第三幕、第二場で、旅役者を宮廷に招いたハムレットが、王の御前で、その役者達に、イタリアにあったという王様殺しのお芝居を演じさせて、国王クローディアスの狼狽する様子を見てとろうとするところがあります。

いよいよ国王が出御され、皇太子ハムレットに言葉をかけるが、ハムレットは真面目にとり合わず、侍従長のポローニアス（オーフィリアの父）に向って、「卿よ、おぬしはむかし大学で演劇を演たとかお言やったなう」と言えば、ポローニアスは、「御意の通り。しかも上手じゃという評判でござりました」ハム、「して如何な役を演じたのぢゃ？」ポロ、「ヂュリヤス・シーザーを演じまして、神殿で殺されました」ハム、「何ぢゃ、嚙取る？　人の命を嚙取るとは、さて〳〵虎のやうな奴ぢゃの」（以上の対話は逍遥訳）

この嚙取るがつまり、ローマのキャピトルを利かせた地口である。このキャピトルは、ジュピターを祠った神殿です。

地口行燈には絵が描いてある。例えば、結んであった細引きが、ほどかれて、のびている、そして、そこに「結び目をほどいてみれば長くなり」と書いてある。これは、「盗人を捕らえ

てみればわが子なり」をもじったもの、また、男が酢のものか何かで酒を飲んでいる図に、「きのう、ほりにて酢蛸で飲んだ」という文句が書いてある。これは「相撲取にて白藤源太」という昔の名力士の名を利かせたものであった。

さて、こうした地口とか川柳というのは、武家制度の下に永らく圧迫されて来た庶民のうっせきしたモヤ〳〵の排け口であった。

明治の御代になって、外国との通商が盛んになり、外国の言葉を修めて、先進国の文化を取り入れ、また同時に、国防のための武力をも貯え、日清、日露の戦に連勝して、覇権主義に鞍がえしたが、大東亜共栄圏の夢も破れて、敗戦国となり、今度は日米安保条約を結んで米国一辺倒となり、アメリカン・イングリッシュが巷に氾濫した。

一頃、米国駐留軍の要員として働いていた日本人の数は、神奈川県だけでも五五、〇〇〇名もいた。そのとき、終戦連絡事務局（山下町にあった）では、海外から戻って来た外交官（主として領事連中）を動員して、その駐留軍要員のために語学手当（主として英語）を出したとき、その加給（additional pay）試験を行って語学の勉強を奨励すると共に優遇策を講じた。そのとき、自分も神奈川県知事から委嘱されて、十五年間その試験官として働いたことがあります。

こうした英語活用の基礎は神中時代にあったように思う。一年生のときから、英人教師フーパー先生から、発音の基礎や会話の初歩を学ぶことの出来たのは幸福であった。先生は日本に帰化されて安藤英富を名乗っていましたが、生れ故郷は南部イングランド、サセック州のチチェスターという所でした。ポーツマスの軍港とかサウサンプトン港に近い所です。たま〳〵昨年、ロンドンに滞在中、文芸評論家のジョン・ラスキンが、その名著、近代画家論（モダンペインターズ）の中で推賞したイギリスの風景画家ターナーのコレクションのあるテート・ギャラリで、この巨匠の筆になるチチェスターの風景画を発見したときは非常に驚きました。それで、早速売店に行き、その絵葉書を数枚買って、神中時代の同窓生に進呈しました。

明治の末から大正の初めにかけて、英語のテキストは勿論、国語の教科書にも英米を初めとする諸外国の風物が翻訳されて載っていました。面白いと思ったのは坪内逍遥の編纂した修身の本には外国の偉人に関する逸話などが引用されていました。

夏目漱石の「カーライルの家を訪れるの記」という紀行文を国語の教科書で読んだのは確か三年生のときでした。漱石は御承知でしょうが、熊本（五高）高校の教授時代に、文部省から二ケ年の海外留学を命じられ、イギリスへ行き、ロンドンに滞在中、カーライルの家を訪れたのです。例の「倫敦塔」という作もその当時の産物です。この作は実に立派な作ですが、一説

には、夏目さんは、買い込んだ参考書を下宿で熟読して書いたので、現地へは余り足を運ばなかったといいます。なにしろ、夏目さんが余り外出せず、下宿で英文学に関する書物に読み耽っていたことは事実です。これは後にラフカディオ・ハーンの後任として、東大の英文学部で行った十八世紀イギリス文学の講義がそれを裏書しております。

ところで、このカーライルの家というのはウエストミンスターの国会議事堂の後方にあるチェルシーという住宅地区で、チェイニーロウ（Cheyne Row）という閑静な所です。彼はここに四十七年間住んでおりました。

ある月の皓皓（こうこう）と冴えた晩に、友人のアルフレッド・テニスン（十九世紀を代表する桂冠詩人）が訪れたとき、いつもの部屋で向い合って坐りました。月の光がその部屋の中に差し込んで来ます。二人は黙々とし半刻（とき）あまり経過しましたが、やおら立ち上りながら、「グランド・イーヴニング」（素晴らしい晩だなあ）と口を揃えて言って別れたそうです。

トマス・カーライルは、スコットランド生れ（一七九五―一八八一）、エディンバラ大学に十五歳で入学、教師の経験の後、ドイツ文学及び哲学の研究を志ざして、ゲーテの翻訳やフランス革命史等の著述で有名です。

またドイツ哲学の影響による「英雄崇拝論（ヒアロウアンドヒアロウーシップ）」及び「衣裳哲学（サーターリザータス）」の名著は、明治大正時代

における わが旧制高校の英語テキストとして学徒の士気を鼓舞したものです。カーライルはチェルシーの聖人と呼ばれ、米国の詩人で哲学者のR・W・エマスンがコンコードの哲人と呼ばれ、この二人は大西洋を隔てて無二の親友となったことは前記の英雄崇拝論と衣裳哲学とによって結ばれた縁でした。

カーライルの記念館で案内して下さった御婦人は、昔、夏目先生を案内された方でしたが、もう相当のお年のようでした。昨年（一九八二年）娘二人と同記念館を訪れたときは、五十がらみの男の監理人でしたが、私共が遥々日本から来たというので、非常に喜び、先ず第一に見せて呉れたものは、来訪者名簿で、K. Natsume（夏目金之助）の署名でした。

一九二四年に私が初めてここを訪れたときは、裏庭の壁にからまっている蔦が煤煙で真黒だったのですが、さすがに近年は公害がなくなり綺麗でした。

カーライルに関するエピソードは種々ありますが、その最も有名な話は、前に申したフランス革命史に関するものです。それは、この大作の第一巻になる原稿を書き上げたとき、これを見てもらうために、友人のJ・S・MILL（ジョン・スチュアート・ミル、当代随一の経済学者）に貸しておいたところ、その家の女中が、御主人の大切な預りものとは知らず、燃料として燃やしてしまった。この珍事に、カーライルも、さすがに当惑したが、これを初めから書

き直したそうです。

このフランス革命史は、文豪チャールズ・ディケンズに非常な感銘を与え、彼の傑作「二都物語」を書く動機となった。あの霧深い夜、ロンドンからの郵便車がドウヴァ街道を走って行く情景は如何にもディケンズ好みの劇的場面で、この大ロマンの幕開きです。

## さげ（エピローグ）

落語もどきに、今日のスピーチにサゲをつけるとすれば、三つのCMとして、第一に、今月二十六日（日曜）の夜、NHKがテレビで放映するサー・ウォルター・スコットの小説アイヴァンホウ（一八一九年作）から取材したサクスンの勇士アイヴァンホウを中心として、リチャード獅子心王（ライオンハーテッド）、ヂョン王、ロビンフッド、ロウウイナ姫と猶太娘のレベッカ等の多彩な人物の色模様から、ノルマン時代のサクスン民族を御覧下さい。

第二は、明治製菓の宣伝文句であるチェルシーはスコットランドの風味とか。私はこのチェルシーから哲人カーライルの滋味溢るる思想を汲みとって頂き度い。

第三は、寄席文字の家元橘右近氏のコレクション「寄席百年」は私を育んでくれた古典落語への憧憬ですが、以上の三つは渾然一体となり、名教自然を徳とする一介のおちこぼれ教師の

「英文学こぼれ話」を披露して、恩師煙洲先生を偲んで、このスピーチを結ぶさげと致します。

## こぼれ話を終った後で

今夕の私の「こぼれ話」が終ってから、元横浜国大教授荒井文治氏はじめ、二、三の方からの御尋ねや、御希望に対して、「漱石とハーン」との関係とか、「真のイギリス人とは何？」「記憶の秘密」、また、拙著「寄席の息子と英文学」中にある「横浜今昔」を語る思い出話などに対する御声援に応えて、せいぜい、この健康に留意し、ハレー彗星をもう一度この眼で観たいという宿願を果たし、浜育ち寄席の息子の「思い出話しどろもどろ」を上梓したいと思っています。

# むすび

文芸の世界において、その題材の基盤は、スコットランドの田園詩人ロバート・バーンズの言う「酒と女と歌」の三要素からなるアラベスク、まあ唐草模様とでも言うべきものであろう。

落語の素材も歳時記として、酒の話、女の話、純真な恋愛や、廓話の手練手管、それに伴う表現を、春夏秋冬に分類することが出来よう。また聴衆も、その季節に応じた噺に、それぞれ自分なりの感想をまじえて鑑賞することが出来るであろう。今日では男女の交際が自由で、両親の知らぬ間に深入りして、学生結婚にまで発展し、同棲生活をしている例は非常に多い。しかし昔は男女七歳にして席を同じうせずという厳しい倫理が通用していたので、「宮戸川」という落語で、お花半七の馴れそめの噺などは非常に色っぽいもので、粋を利かす叔父さんが、自分の若い頃の思い出を語るところがクライマックスである。酒の噺に至っては枚挙に暇がな

い。それこそ「まんじゅうこわい」といった甘党の話とは比較にならぬ程沢山ある。女の出る噺は絶対多数で、天照大神の昔から女ならでは夜の明けぬ国という日本の民芸としての落語では話の原動力であり、天下御免の吉原や島原から江戸の四宿、品川・内藤新宿・板橋・千住のいわゆる岡場所における男女の関係は、仙台侯が大金を積んでもどうにもならなかったという高尾太夫という大籬（まがき）の花魁から「チョンチョン格子」の女郎が出て来る、つまり、プロの女に手玉にとられて気の毒な鼻下長の姿などを巧みに描いた「五人廻し」のごとき落語は、今日でも通用する噺だが、赤線区域のなくなった現在では、一般に廓噺はむずかしくなった。それはお客様の層が若くなったことと、第一落語家自身、その経験を有する者が少くなったからだ。それにしても、古今亭志ん朝君や春風亭小朝君のような若手に、あれだけのお色気が出せるのは全く話芸の力で、古典に対する基礎知識が、先輩からよく継承されているからであろう。この点では歌舞伎における女形（おやま）が女優よりも優っているのと同じでしょう。

最後に、歌というのは自己の表現であり、自分の周囲にある自然や環境に対する観察と、それによって感応する心情、まあ、感情輸入とでも言うべきものが、噺の書割、背景に使用される。人間の感情発露が特に女性の嫉妬となり、夢で見た夫の浮気に対してまで、それが爆発する。「悋気（りんき）の火玉」等がそれだ。元来落語には空想的な要素がある。それが高じると「嘘」と

なり、「うそつき村」とか「うそつき弥次郎」となる。「弥次郎」の場合は、話手のテンポが早く、聴き手がそのポンポン出て来る言葉を受取る用意のないうちに話題を変えてゆくところにお笑いがあるので、野球にたとえると、捕手がサインを出さぬうちに、つまり捕球の構えをしないうちに投手が投球して暴投になる類で、嘘つきはこうした聴き手の構えが出来ぬスキをねらうのが多い。筆者は若い頃、故人になった品川の師匠、橘家円蔵（故六代目三遊亭円生の師匠）のこの噺が好きだった。「弥次郎」の場合は無意識のうちに嘘が飛び出して来るようだ。昔から「うそつきは泥棒のはじまり」というが、落語ではいろんな泥棒が出て来る。

人情噺になると泥棒も深刻であるが、落語の方に出て来るのは大抵喜劇的で、「金門五三の桐」の石川五右衛門のような「絶景かな、絶景かな!!」などと大見えをきる大物ではなく、「碁どろ」「釜どろ」「つづら泥」「穴泥」等、罪のない連中である。もっともこんな連中でも裁判にかけられると、家宅侵入罪になるかも知れませんが……。

「碁どろ」で連想されるのは「傘碁」ですが、こうした趣味とか道楽の噺は無邪気ですね。昔、三代目小さん師匠の「傘碁」を聴いて感心した筆者は、近年現小さん師匠のこの噺を聴いて、その口演が三代目に優るとも劣らない話芸だと拙著「寄席の息子と英文学」に書いたことがあるが、三代目小さんの真の継承者は五代目小さん以外にはないと思っている。

この柳派と対照的な三遊派の円朝や円喬以来、その正統を継いでいた故六代目三遊亭円生師の継承者となる人は果して誰であろう？　落語界きっての物識りである円楽君がようやく円熟期に入ったので、三遊派の話芸をぜひ後輩の諸君に伝承して貰いたいものだ。

昭和に入ってからの名人と言われた故桂文楽師や故古今亭志ん生師の芸風を継ぐ人は誰なのであろうか。廓噺に妙味を発揮した文楽師の芸風は、志ん朝師や小朝君に期待されるのであるが、立川談志先生のようなインテリで、しかもプライドのある師匠には、故人になった（最後は盲目になった）小せん師匠のように、辛辣な皮肉を盛りながら近代的ヒューマーのある話芸を開拓して貰いたい。近代的と言えば三遊亭円歌師匠の話芸には音楽的なセンスがあり、そのオリジナリティの点で、先代を遥かに凌駕しているように思う。現代落語として上品な話芸の代表者は桂米丸師匠だろう。望むらくは、この師匠が古典と取組んで新機軸を出して貰いたい。そのお弟子さんの桂歌丸君は芸能界の鬼才三波伸介君の「笑点」で、その代表的メンバーとして、傑出した才知を窺がわせているが、この若手の勉強家に一層古典の研究を励んで貰いたい。

近年ハマに落語鑑賞の灯がともされるようになったことは嬉しい。

近年若手の落語家が、ようやくに目醒めて芸道に精進するようになり、目白押しの二ッ目か

ら真打昇進をねらう競争が白熱し、「真打昇進の試験」という制度が出来たことは、高卒の連中と同じようで、気の毒にも思うが、その試練があればこそ、芸道の進歩があるのだから我慢して頑張って欲しい。C・Mを本業以上に考えて精進を怠ることのないようにして頂きたい。

要するに、芸能人の真価は、その伝統的基本をまず習得して、その型を超越するために独自の個性に磨きをかけて、その光を放つように精進する努力によって査定される。

今日芸能界のタレントがC・Mで荒稼ぎしているのは、芸の精進ではなくして、むしろ芸の安売り、低俗な大道芸が悪の道へと堕落するのと同じである。昭和五十六年十一月二十七日、朝日新聞の「天声人語」に載っていた「西独には現在、童話や昔話の語り手、つまり、プロの語り手、プロの語り部が四百人もいる」という記事は、非常に示唆に富んだ話で、プロの落語家はもとより、話術を業とする人、広く一般の教師にも、その思想、感情の伝達において、いかに話術が必要であるかを教えている。俳優の沼田曜一君が全国の老人ホームをめぐり、「民話の旅」を続けていることは心の温まる話であり、近時、宝井馬琴先生の一門が辻講釈をやりはじめたことは、これまた嬉しい話である。

昭和五十九年三月二十五日　印刷
昭和五十九年四月　四　日　発行

# 煙洲先生と横浜

著者　竹内秀雄
〒232　横浜市南区大岡一の二四の八
電話〇四五―七三一―一三八二

発行者　煙洲会代表　菅要助
幹事　村松四郎
〒135　東京都江東区豊洲四の六の二
印刷所　株式会社　白橋印刷所